

『明るい表通りで — On The Sunny Side Of The Street—』

作 三谷 智子

■登場人物

- 佐伯 アヤ ……佐伯煙草店の主 四十歳
兵頭 ユミ ……佐伯家の次女 三十八歳
佐伯 章子 ……佐伯家の三女 二十五歳
河野 洋平 ……章子の恋人 二十九歳
兵頭 将之 ……ユミの夫 四十二歳
小仁田 桑子 ……カフェ パダンパダンの主 四十一歳
長友 和昭 ……日の出不動産の社員 三十九歳
荒木田 貴一郎 ……日の出不動産の社員 四十歳
内藤と呼ばれる男 ……来来軒の従業員 三十六歳
ゴールデンバットを買いに来る中年男
小仁田 日出男 ……喫茶コニタの主／桑子の父 当時四十六歳
佐伯 節子 ……佐伯姉妹の母 当時四十五歳

■背景

都内とはいえ、都心から離れたベッドタウンの町。戦後闇市から続く「日の出通り商店街」は、都市再開発計画の影響で地上げ攻勢にあっている。

駅を西にして東へと伸びる日の出通りは、かつて通りの東から朝日が昇り、通りの西には夕日が沈む、明るい通りだった。

しかし昨年末に通りの東、国道沿いに巨大ショッピングモールが完成。

通りの東から昇る朝日を見る事はもうない。

寂れてゆく商店街。毎年賑わった商店会主催の花火大会は今年で最後になる。

都市再開発計画では、商店街一体を取り壊し、西側の駅は高架に。駅向こうから国道まで、現在の商店街の上に東西へ伸びる広い道路を築こうとしている。

地上げの元締め「松島商会」は、国や銀行から資金を受け、ヤクザまがいの業者や個人を雇って地上げを進めている。駅前不動産屋「日の出不動産」も松島から地上げの仕事を受け負った業者の一つ。

日の出不動産の社員、長友と荒木田は、日々店を回り説得を試みる。

切り崩され立ち退いて行く店もある中、頑として立ち退きに応じない店も幾つかあった。その内の一つ「佐伯煙草店」は、親の代から続く煙草屋。長女で主のアヤ、三女の章子、章子の恋人で居候中の河野が住んでいる。

■開演前〜開演時 十六年前 八月三十日

一軒家の一階半分が店舗になっている煙草屋。下手側が店舗。店舗側の奥に入口。

奥、中央辺りに煙草屋ならではの販売用窓。机と椅子。吊棚に煙草の在庫が並ぶ。

店側の手前の方に、テーブルと椅子2つ。

上手側は居間。茶箆筒、卓袱台、扇風機、オーディオ、姿見。半間程の押入れがある。

奥にはこの家の玄関へ通じる廊下と二階への階段。

居間から繋がる上手側手前に台所。蟬の声。たまに風鈴の鳴る音。

居間の卓袱台には食べかけのスナック菓子と麦茶。

店側のテーブルの上には手提げ鞆。鞆からはみ出したピアノカ。

居間の方へ上がる框の傍に、女の子用のサンダルが脱ぎ捨てられている。

通りに設置されているスピーカーから聴こえてくる音楽は、商店街らしい軽快な調べ。

独特の言い回しの女性アナウンスが、各店の売りなどを紹介している様子。

開場時間中」 開演十分前

販売窓の外で打ち水をしている佐伯節子。店の戸口から入って来て卓袱台を見る。

節子 曄っ、食べちらかして…章子おーっ…ちよっとおー……いないのっ…まったく」

節子、台所から盆と台ふきんを持って戻って来て卓袱台の上を片付け、台所へ去る。

ややあつて居間へ戻って来る節子。

節子 ほあく、あつたい」

煙草を出して吸おうとするが、店のテーブルのピアノカが気になる。

店へ降り、ピアノカを手取る節子。遠くで豆腐屋のラッパ。その音を真似て

節子もピアノカで「マーファー」と吹いてみる。販売窓越しにそんな節子を見つける

小仁田日出男、店の戸口から入って来て。

小仁田 マーファー」

節子 曄っ、びっくりした。いらっしやい」

小仁田 せつちゃん、セツタ頂戴。せつちゃんだけに」

節子 「セブンスターを渡しつっ」もー、毎回それ言っのやめてよ」

小仁田 何でっ、面白くないやんっ」

節子 面白くないよ」

小仁田 そうっ、アヤちゃんなんかいつも笑ってくれたけどね。俺のギャグ」

節子 アヤ程甘くないんでね。あたしは」

小仁田 きーびしっ。ハハハハッどれどれ」

小仁田、ピアノカを吹こうとするが、節子がそれを取り上げる

節子 ちよっと」

小仁田 何で」

節子 章子のだから」

小仁田 自分も吹いてただろう」

節子 だからやなの」

小仁田 ひつでえ。昔はビデちゃんせつちゃんつって乳繰り合った仲だろうが」

節子 ばあ？、いつ？、いつ乳繰り合ったのよ」

小仁田 松の湯だよ。一緒に男湯入って体洗いっしてさあ」

節子 ばあか、三つか四つじゃな」

小仁田 照れんなよ」

節子 づるさい。吸ってくの？」

小仁田 うん」

節子、テーブルに灰皿、ピースの空き缶を置く。座って煙草を吸う小仁田と節子。

小仁田 「ないだよ」

節子 匂？」

小仁田 東の何軒目だ？ほっかほか亭の横にコンビニできたろ。スリーP、略してサンP」

節子 スリーエフね。てかどう略したのよ」

小仁田 そうそうサンエフ。あそこできさ、煙草買おうとしたのよ」

節子 うん」

小仁田 で、さっきみたいに言った訳。“姉ちゃん、セッタ頂戴よ”って」

節子 うん」

小仁田 じたらさ、あれバイトだろうね。何だったと思う？」

節子 ぎあ…」

小仁田 ウチは、履物は取り扱ってません。だって」

二人、笑う。

小仁田 もう拍子抜けしちやってさ、何も買わずに出て来ちゃったよ」

節子 分かんないわよそんな言い方。てか履物だと思っただけ偉い」

小仁田 刃な店で扱ってんだから、呼び方くらい知っとけよ」

節子 (笑)「まあねえ」

小仁田 「あ、せつちゃん今日行く？」

節子 「あ？」

小仁田 「花火」

節子 「ああ、多分」

小仁田 「じゃ、一緒に行こうよ。ソウも帰って来てるしよ」

節子 「フウちゃん来てるの」

小仁田 「うん。アヤちゃんとユミちゃんは？」

節子 「どうだろ。来ないんじゃないかな。仕事忙しいみたい」

小仁田 「そっか。忙しいか。……しかしあん時はホント心配したよな」

節子 「え？」

小仁田 「春に。地下鉄のさ」

節子 「ああ」

小仁田 「セツちゃんもう青ざめて、電話しても出ない。乗ってたかもしんないって」

節子 「ひたら風邪引いて、部屋で寝てて。電話出らさうの」

小仁田 「まあまあ。しかし運が強えよアヤちゃんは。不謹慎かもしんねえけど、良かった

「よ。生きててよ」

節子 「うん。……章子が帰って来たら電話するわ」

小仁田 「え？」

節子 「花火」

小仁田 「ああ」

節子 「でも、遅くなりそうだったら行っちゃって」

小仁田 「うん。(腕時計を見て)お、始まっちゃっ」

節子 「何？」

小仁田 天相撲

節子 貴ノ花？

小仁田 そう。横綱になって益々強くなったよ。分かってたけどな。ウルフ倒した時に

節子 えー可愛そうだったよ千代の富士。あれで引退したじゃん

小仁田 ほか、違うよ。いい幕引きを与えたんだよ

節子 ほあ？

小仁田 千代の富士ってさ、昔へビースモーカーだったんだぜ

節子 え

小仁田 ぐで、ある人に言われてやめたの。誰だと思っ？

節子 知らないわよ

小仁田 貴の花。父ちゃんの方ね

節子 あそう

小仁田 そうよ。それからメキメキ強くなった訳よ。どうよこれ

節子 何が

小仁田 何が？って。運命を感じるだろ。自分を強くしてくれた大先輩。その息子に敗れて引退って。ドラマだよもっ

節子 (笑)かもね。いいの？もう始まんじやない？

小仁田 お、じゃまた帰ろうとする

節子 あ、マスター！ 後でいつもの

小仁田 ヤリマンジャロね

節子 うん

小仁田 フウコに持ってかせるよ(去る)

節子 ありがとー

節子、煙草を消し、ピアノカを片付けようとして、手提げ鞆にほろびを見つける。

節子　ちよっとこれ、あーあ」

節子、居間の卓袱台にピアノカと手提げ鞆を置くと、二階へ去る。

開演五分前」

商店街のスピーカーから流れる女性のアナウンス。

花火大会」の宣伝。及び開演前の挨拶（携帯、音の出る物の電源OFF等）

節子、二階から裁縫道具を持って降りて来て、鞆のほころびを縫い始める。

開演前」

花火大会を知らせる、空砲」が鳴り始める。

節子、縫う手を止め、空砲の数を数える。五回目の空砲。店の戸口を見遣る節子。

何も変わらず。

節子、縫い物を終え、一枚のレコードをかける。

ルイ・アームストロングのトランペットの調べ。―明るい表通りで―

ゴールデンバットに火をつけて吸いながら、奥の販売窓の前に座る節子。

その後ろ姿を夕闇が包んでいくように、溶暗。

■ プロローグ（二〇一一年、二月のある夜）

暗い店内。レコードではなく、CDから「明るい表通りで」が流れている。
十六年前と違い、店には手作りの小物やエプロン等も商品として置かれている。
かつて、節子が座っていた販売窓の椅子に長女の佐伯アヤが座っている。

窓の外に煙草を買いに来た男、荒木田。窓の外に、ちらほらと雪。

荒木田 マイルドセブン…あ、やっぱりラッキーストライク。あとこれ（百円ライター）

アヤ はい。少々お待ちください

吊り棚の煙草を取ろうと椅子にのぼるアヤ。

寒さに手をさすりつつ待つ荒木田。と、スカートからはみ出たアヤの脚を見ま
う。ラッキーストライクを手に椅子から降りるアヤ。見てなかった振りの荒木田。

アヤ お待たせしました。ラッキーストライクとこれで…五四五円です

荒木田 え？…あそっか

アヤ え？

荒木田 値上がりしたんですね。煙草

アヤ …ええ。十月に

荒木田 すいません。ずっとやめてたもんで。今気づいたっていうか

アヤ そうなんですか

荒木田 ええ…（財布から千円札を出して払う）

アヤ あっっ

荒木田 え？…あ、細かいのなくて

アヤ 霜焼け

荒木田 …？

アヤ （荒木田の指を指し）「」

荒木田 ああ

アヤ 「ぢやんと待って下さい」

荒木田 あの

アヤ、店の商品から白い手袋を持って来る。

アヤ 「れどござ。よかったら」

荒木田 え、でも

アヤ 「いんです。もう2月でしょ。これから手袋買う人あんまりいませんから」

荒木田 や、でも

アヤ 残り物ですから

荒木田 「はあ、じゃあ、お幾らですか？」

アヤ 「いんですいいんです。ていうか元手かかってないんで。実は」

荒木田 元手？

アヤ 古いセーター、解いて編んだから。だから

荒木田 「手作りなんですか」

アヤ はい。不恰好でしょ？ちよつと

荒木田 そんな事ないです。良く出来てます！

アヤ、笑う。

荒木田 あ、すみません

アヤ ありがとうございます

荒木田 じゃあ…これ、ありがたく。すみません

荒木田、手袋をはめてみる。手袋は指の部分が分かれていない女物。

アヤ 「すみません。女物で」

荒木田 「や、あつたかいです」

アヤ あ、お釣り」

荒木田 あの、(禁煙具とガムを取り)これも

アヤ はい。じゃあ…えーっと

荒木田 「いんです」

アヤ えっ?

荒木田 お釣り、いいです

アヤ じゃ

荒木田 「いつもこんな時間までやってるんですか?」

アヤ 「いつもは、7時くらいまでです。今日は閉められてて…。何時までやってもいいんですけれど。自宅です」

荒木田 ああそっか。…じゃあ、ホント有難うございます。これ。…おやすみなさい

アヤ おやすみなさい

荒木田 「ハ…」

走り去る荒木田。

アヤ あ、お客さんこれ!!

荒木田が忘れて行った禁煙具とガムを持って後を追うが、荒木田の姿はもうない。

アヤ、戻って来る。店の戸締りをし、カーテンを閉める。

アヤ 「もうかっっちゃった」

暗転。音楽 バーデイドストリートブルース

■ 商店街の映像

戦後の闇市。昭和三十年代頃の賑わい。

寂れてきた現在の商店街。↓閉店告知の張り紙／高いビルを背にした古い店等↓

煙草屋の外観。自動販売機。販売機から煙草を取り出す男の手のアップ

■ 一場 (八月十四日 昼下がり)

蝉の声。時々風鈴が鳴る。大量の荷物を両手にした女が居間に入ってくる。

女は口に鍵を啜えており、鞆の一つからは荷物がはみ出している。

女(兵頭ユミ)、居間になると荷物を投げ出し鍵を吐き捨てる。扇風機をつけて

ユミ はあ〜…ぬるっ。(消す)…ん？(前方にクーラーを見つけ)おっ、つけたんだ！○

(リモコンを探し(これか？…))リモコンをクーラーへ向けて操作。何も起きない

あれ？違うか…(またリモコンを探し始める)

店の戸口から男が入ってくる。ユミの様子をしばらく見ている。

男 「こんにちはー」

ユミ ひっ…あ、っ、こんにちは

男 「…」

ユミ えっ

男 「あれえ？」

ユミ あの

男 アヤさんいられますか？」

ユミ 「られっ？…あ、さあ。出かけちゃってるのかな。誰もいなくて

男 そか

ユミ あの、ごさう様で

男 ナイトウです」

ユミ ナ…ナイトウさん？」

内藤 はい。お客様ですよ

ユミ え？(店へ降りて販売窓を開けたり)…どここ？」

内藤 私、お客様ですね

ユミ 「…ああ、ナイトウさんがね

笑う内藤。おもむろに店の品物を物色し始める。

ユミ 「…何なの？」

ユミ またリモコンを探し、棚の引き出しを開ける。

ユミ わっ、なんじゃこりゃ（引き出しから幾つものリモコン）えっ…これかあ？」

リモコンの一つをクーラーに向けて操作。クーラーは全く動かない。

内藤 壊れました」

ユミ えっ何が壊れました？」

内藤 クーラー、壊れました」

ユミ え…そう、なんですか。いつ？」

内藤 かなり前ね。アヤさん、修理しない言いました」

ユミ なんてっ」

内藤 （手作りらしきエプロンを手に）これ幾らっ？」

ユミ え、あー…（店へ降りて品物の値段を確認し）三百円ですね」

窓の外に犬を連れて女が来る。

内藤 三百円。…これ三百円っ？」

ユミ はい」

内藤 ちょっと高くて手が出ないな」

ユミ え…」

内藤 「これ三百円っ？」

ユミ はい。…そう書いてあるし。多分…三百円だと思うけど」

戸口からさつきの女が入って来る。カフェ、パダン、パダンの店主。小仁田桑子。

桑子 「…ユミちゃん？」

ユミ 「…クワちゃん！」

桑子 やーだー！…どうしたのよ」

ユミ クワちゃんこそー！ あ、里帰り？お盆だもんね」

桑子 やだ聞いてない？アヤちゃんから」

ユミ 今帰ってきたばっかで」

桑子 あそー。アタシ出戻りいー。アハハハ」

内藤 三百円」

ユミ 別れたの？」

桑子 っうんまだ。別居中」

内藤 三百えくん？」

ユミ そう…」

桑子 去年、父ちゃん倒れちゃって。心筋梗塞。それからもう色々大変」

内藤 「これ三百円？」

ユミ そうだって言ってるじゃん！…あ、ごめんなさい」

桑子 あ、来来軒の、えっと…」

内藤 尹、イトウです」

桑子 尹、イトウさん…ナイトウさんね。どうも」

内藤 さもー(ユミに)「これ三百円？」

ユミ そうだと思いますけど…ちょっと待っててください」

内藤から離れた所へ桑子を引っ張って行く。

桑子 やでしたの？」

ユミ あのエプロン。幾ら？」

桑子 書いてあるでしょ。値札に」

ユミ うん、値札見て三百円て言ったら、高いとか言われてさ」

内藤 「腕時計を見て(アイヤァー！ 遅れる！ 私仕事。またね」

内藤、手にしていた品物を投げ捨てて出て行く。

ユミ ちよつと

桑子 おかしい

ユミ 何が？

桑子 あれ、日本人じゃないよね？

ユミ でも内藤さんだって

桑子 それが変なのよ。来来軒の店員なんだけど

ユミ 来来軒…あれか。西の入り口から三軒目？

桑子 そうそう。その従業員。前はリーさんとかホンさんとか、そんなんばっかで

ユミ うん

桑子 なのに先週ぐらいからみんな、田中さんとか斉藤さんとか、日本人の名前に
なっちゃったの

ユミ なっちゃった？

桑子 日本人の名札で働いてんの。おんなじ人よ。顔一緒よ

ユミ へえ

桑子 怪しいでしょ

ユミ まあね

桑子 アイヤーって言ってたし

ユミ 言うでしょ。日本人でも。アイヤーって

桑子 (爆笑)言わないよ日本人は。ワーとか、アレーとかだよ。アツハツハツハ

ユミ 「で、何があったの？」

桑子 えっ？

ユミ おじさんが倒れたって

桑子 そうなの。そんでき、一緒に住ませてくれて旦那に頼んだの。いつまた倒れる
か分からないじゃん

ユミ 「え、家にいるのっおじちゃん」

桑子 「うん。退院して家にいるけど。心配じゃない」

ユミ 「さっね」

桑子 「で、父ちゃん引き取れないかって」

ユミ 「ああ」

桑子 「だから、旦那の親が怒っちゃって」

ユミ 「何でっ？」

桑子 「うち、マンション買ったのに、旦那の親が頭金出してんのね。いずれ自分達が同居するから金出したんだって。一銭も出してない人間住ませるなってさ」

ユミ 「あらー」

桑子 「まあ分かるよ、気持ちには。でもさ、向「う」の親と住まないって事じゃなくて。

とりあえずウチの父ちゃんが心配だからって。老人ホームとかおいおい考えるって言ってるのになあ。す「い」警戒しちゃって」

ユミ 「旦那さんは何て言ったのっ？」

桑子 「何にも。逆らえないのよ。金銭的な負い目っもういいって出て来ちゃった」

ユミ 「ソウウ君はっ？」

桑子 「旦那の実家。連れて来れなかった」

ユミ 「やっっ…」

桑子 「どうがない。とにかく父ちゃん放つとけないし。店も誰かがやんなきゃだし」

ユミ 「おお。ど「う」っ繁盛してるっ喫茶コニタ」

桑子 「フフ、微妙」

ユミ 「何それ」

桑子 「店の名前変えたの。今はね、カフェ。パダンパダン」

ユミ 「えー」

桑子 「どうしょ」

ユミ 「う…ん(笑)」

桑子 「ね、アヤちゃんどこ行ったの？」

ユミ 「さあ。来る前電話したんだけど、誰も出なくて」

桑子 「ぞっ」

ユミ 「仕事じゃない？」

桑子 「永曜休みだよ。洋裁教室」

ユミ 「あそう。どこ行ったんだろ。携帯に電話しよっか？」

桑子 「いいいいの。いたら一緒に散歩でもしよっかなあと思って。ジュリアン連れて」

ユミ 「ジュリアン？」

桑子、ユミを外に連れて行く。犬が喜んでクンクン言う声。

ユミ 「可愛いー」

桑子 「でしょ。イケメンでしょ。超大人しいの。私の彼氏い」

ユミ 「オス？」

桑子 「オス」

ユミ 「ぶーん」

ユミ、桑子、戸口から中へ入って来る。

桑子 「あの子しか連れて来れなかったわ…」

ユミ 「ぞう。…しかし、章子もないのかな」

桑子 「あ、シヨコたんはお店見てくれてる」

ユミ 「シヨコたん？」

桑子 「うん。章子ちゃんウチでバイトしてるから」

ユミ 「バイト？…もしかして、まだ芝居とかやってんの？」

桑子 「大丈夫よ。あの子はあの子で頑張ってるのよ。しっかり働いてくれてるし」

ユミ ぶんっ、(居間の荷物を持ちつつ)大体甘いんだよ。アヤ姉は

桑子 甘あまあ

ユミ 「めんね。アヤ姉え帰ったらクワちゃん来たって言うへ」

ユミ、両手一杯荷物を持って階段を上がって行こうとする。

桑子 「ミちゃんー」

ユミ えっ

桑子 それどうすんのっ?

ユミ ちうって、あたしの部屋に持ってくんだけど

桑子 ああ…

ユミ 実はあたしもさあ

桑子 ちよっと待って

ユミ えっ

桑子 部屋行くの、ちよっと

ユミ えっ何で

桑子 えーっと

ユミ 何なのっ?

桑子 「や、さ…」

ややあって、ユミ、勢いよく階段を上がっていく。

桑子 待って、ユミちゃんー!

桑子もユミを追って二階へ上がる。風鈴の音。販売窓にスーツ姿の男、長友。

長友 早く来いって

荒木田 「はい(汗を拭きつつ)やって来る」

長友 俺だって他にやる事あんだぞ

荒木田 すいません

長友 お前、入ってもう半年だろ。何で一回も訪問してないの？」

荒木田 すいません」

長友 謝りやいってもんじゃね」

犬がさかんにほえる。

長友 うわあ〜っ！」

荒木田 わあ、可愛いなあ(犬をなでている様子)」

犬、クーンとおとなしい声。長友、店内に逃げ入る。

長友 おいつ…おいつ」

荒木田 はい」

長友 早く入れよ」

荒木田 ああはい(入って来る)」

長友 めっそー、ここ犬飼ってんのか」

荒木田 そんなはずないんですけど」

長友 何で分かるんだよ？一回も来てねえんだろ」

荒木田 その…前を通ったことはあるんで。他の店行く途中とか」

長友 へえ」

二人、しばし居間の方を見てほんやりと立ったまま。

長友 おい」

荒木田 へ？」

長友 へ？じゃねえよ。何か言え」

荒木田 ああ…(もしもし)」

長友 何だよもう。すいませ〜ん…ごめんくださ〜い…留守ですか？」

荒木田 帰りますか」

長友 何でっ。状況分かってんのお前」

荒木田 はあ

長友 あと2週間だぞ2週間。今やなくてどうする。もうないぞこんな仕事」

荒木田 別に…私は不動産屋の仕事だと思って入った訳で。不動産屋の仕事は家を探してあげることで。だったら不動産屋らしい仕事に戻れた方が

長友 ほかっ！不動産。な、俺らの扱ってる商品はフ・ド・ウ・サ・ン。家だけじゃないんだよ。土地、土地だって不動産なの。欲しがってる人に土地をご用意する。これも立派な不動産屋の仕事だろ」

荒木田 だからって地上げまでして

長友 づるさいっ！二度と俺の前で地上げって言うなよ。いいな」

荒木田 でも

長友 シヤラップ」

荒木田 「…」

長友 普通に賃貸斡旋してとんだだけの儲けになる？こんな辺鄙なとこだよ。まあ、「」に「」にマンションでもおっ建つ様になりや別だけど。その為にも早く地上げを

荒木田 あ、地上げって

長友 づっせえ！」

荒木田 「…」

長友 すいませーん！…何だよ」

荒木田 留守ですよ。明日来ますから」

長友、店のテーブルで煙草を吸い始める。

長友 だじやないだ」

荒木田 え？」

長友 判押してねえ店」

荒木田 えつとー、ここと。パダン。パダン。それから江波戸ベーカーリーに床屋、何だっけ…」

長友 稲本理容室」

荒木田 それです。それと来来軒」

長友 来来軒な。あら大丈夫だ。俺手え打つといたから」

荒木田 え？」

長友 見てろ。こついう古い商店街つてのはさ。叩けば必ず埃が出るんだよ。絶対弱点がある。荒木田君、コツを掴めよそろそろ。じゃねえと上手く行かないよ。
地上げなんて」

荒木田 あ、また」

二階からバタバタと「ユミ、桑子が降りて来る。

長友 あっ」

桑子 落ち着。あたし店帰つて連れて来る」

ユミ 「いい。あたしが行つて話す」

桑子 待つて。取り敢えずシヨコさんに伝えて帰らせるから」

ユミ やめてよ。シヨコたんていうの。ムカムカする」

桑子 なんでえー。可愛いのに。あたしがいづいたのよ」

ユミ もついいから」

長友 あの…」

ユミ えっ」

長友 佐伯アヤさんでいらつしやいますか」

※ユミ 「や…」

※荒木田 「長友さんっ（袖を引つ張り“違つ”というジェスチャー）」

長友 「無視して）お取り込み中失礼します。私、こついう者です」

長友、ユミに名刺を差し出す。

ユミ 印の出不動産…」

長友 昨年可決されました、都市再開発計画については既に「ご存知かと思えますが」

桑子 「ユミから名詞を奪い取り」聞かなくていい。「いつら地上げ屋なんだから」

ユミ 地上げ??」

桑子 商店街潰して道路作るとか言っつてさ、立ち退かせるつもりなのよ」

ユミ え…」

桑子 (荒木田を指し) あなた、こないだウチに来た人でしょ。いいこと?ウチもこの佐伯さんちも絶対立ち退かないから。分かったらお帰んなさい!」

ユミ ちょっと待って」

桑子 何??」

ユミ もし立ち退くことになったら、それ相応の保障はして下さいるんですよ??」

桑子 ユミちゃん!」

長友 もちろんです。まずお引越しかかると思われる資金。大体まあ…五十万くらいですか?それに迷惑料も上乘せ致しまして百万。更に、新しいお部屋の家賃半年分くらいプラスして百五十万円、ご用意致します。他の店舗さんには」

ユミ お話になりませんね。お引き取り下さい」

桑子 え、そうよ。お帰んなさい」

長友 まあ聞いて下さい。他の店舗さんには今申し上げたより低い金額で「ご承諾頂いてましてね」

桑子 ウチは承諾してません」

長友 うん、そうかもしれない。でも」

ユミ 申し訳ありませんが、私、佐伯ではないので」

長友 は??」

若い男女が言い争いながら店へ入って来る。男は河野洋平。

女は佐伯家三女、章子。「パダンパダン」とロゴマークの入ったエプロンを着けている。

河野 待てよ。何なんだよ」

桑子 あれっ…「シヨ」たん？」

章子 理由を言えっ…ってんの」

ユミ「桑子に」誰あれ？」

桑子、ユミに何やら耳打ち。

河野 何回言わせんだよ。バイトだって」

ユミ えっ？」

章子 バイトなんかいつもずる休みしてんじゃん。何で休めないのよ」

河野 ずる休みなんてしてねえよ。小学生かよ」 ユミ 章子…ちよつと章子！」

荒木田、河野を見ていたが、急に長友の後ろに隠れる。

章子 言わないのね。自分で言わないのね」 長友 おいっ」

河野 もう何のことだよ」

荒木田 シー(黙ってという仕草)

長友 シーじゃねえだろ」

章子、販売窓の方へ。

荒木田 帰りましょう」

長友 ほかっ」

荒木田、店の戸口から逃げ出す。追って走り出ていく長友。

章子、机の引き出しからA4の封筒を出して河野に突きつける。

河野 あ…」

章子 すっ…いじゃん、今度筆記試験だっ…それ受かったらいいよ最終面接？」

河野 「勝手に人のもん見んなよ」

章子 はあ…「こ」は私んちなの。洋平んちじゃないの。それを自分宛に」

桑子 シヨ「たん！」

章子 クワちゃん」

桑子 お店は？」

章子 え？」

桑子 閉めて来た？」

章子 開いてる」

桑子 えーっ！

章子 大丈夫。お客いないから。レジの鍵持って来たし」

桑子 「レジの鍵を取り」何言ってるの。「レジ」と持ってかれちゃうわよ」

桑子、ジュリアンを連れて急いで帰って行く。

ユミ 何がすっかりバイトしてるよ。呆れた」

章子 ユミ姉え」

ユミ あんた」

章子 「河野に」どうすんのよ収録っ！行くの行かないの？」

ユミ 聞いてるっ」

河野 無理だよだから。試験あるから」

ユミ ねえ」

章子 あそっ。じゃあやめるのね。やめるって事でいいのね」

河野 色々考え中なんだよ。就職したって続けられるかもしれないだろ」

章子 無理だね両立なんか。今だって何もしてないのに」

河野 「しょうがねえじゃん。金もねえし。借金だっであんだから」

ユミ 借金っ」

河野 もうちょっと待ってよ。ちゃんと考えるから。俺はさ、走りながら考えてんの。

模索ってやつなの。人生の」

ユミ 章子っ！

章子 何っ！

ユミ な…あんたアタシに何か言うっ」とあるんじゃないっ」

章子 えっ…ああ、お帰り」

ユミ ちやうちやう。そっ！っ事じゃないっ！

章子 何？今取り込んでるんですけど」

ユミ その人誰？そして何でアタシの部屋に彼の荷物が入ってるの？」

章子 ああ。これは河野洋平さん。一応アタシの彼氏」

河野 「応って…ええ？」

章子 姉。結婚してる姉がいるって言ったでしょ」

河野 マジでっ。早く言えよ。はじめまして。河野です。宜しくお願いします」

長友に背中を押されつつ荒木田、戻って来る。店の中へ。

ユミ さうも。で、何で君が私の部屋を使っているんだろうか」

章子 『めん。色々あってここに住んでんの。アヤ姉えにはちゃんと許可もらって」

ユミ アヤ姉えが許しても私は認めない」

章子 「いいじゃん。結婚してんだから。滅多に帰って来ないでしょ」

ユミ 結婚したけど今はしてない。いや今後そついう事になるでしょう。帰って来る事にしたから」

章子 えっ」

長友 今帰ってくんよ」

荒木田、再び逃亡する。追って出て行く長友。窓の外で二人の攻防。

ユミ 「河野に（荷物、どかして」

河野 え…（章子に）ぶっついでしょ」

章子 めちゃくちゃ言わないでよ…」

ユミ つるさい。早く荷物出して。（章子に）あんたも手伝いな」

河野 でもあの…」

ユミ 自分でやんないなら私が下ろすけど、いいのね」

ユミ、二階へ上がって行「うとする。長友、荒木田を引きずって店の中へ戻って来る。

章子 勝手な事しないでよ」

ユミ 勝手っどっちが勝手よ。断りもなく他人に部屋使わせて」

章子 ちゃんとアヤ姉えに相談してるの」

ユミ アヤ姉えには抗議しとく。とにかくあそこはアタシの部屋なの。今日からまた使っから(再び二階へ行「うん」)

長友 あの」

章子 ぼっきり言って迷惑だよ！…普段はウチの事なんて気にしないでくせに。お盆も正月もずっと帰って来なかったじゃん。都合のいい時だけ家族ぶらないでよ！」

ユミ 「へえ。あんたにそういつ」と言われるんだ。アタシは」

章子 「何よ」

長友 お取り込み中すいませーん」

荒木田 あっ(また長友の後ろへ)」

ユミ まだいたんですかっ！」

長友 (笑)そうカリカリしないで。私がお聞きした限り、皆さん同じ悩みを抱えてらっしゃる。住宅事情っお住まいにお困りですよねっぶっつなしてよっつっ

私たちが日の出不動産がそれぞれに合うお住まいを「用意して」

ユミ 結構です。取り込んでますので、お引取り下さい」

河野 (荒木田が気になり)あれ？…」

長友 まあそう言わず…おい…おい荒木田っ。お前ホントに営業やってたのかよ！」

河野 カンチョウ先生！」

※ユミ ぼっ」

※長友 えっ？」

※章子 カンチョー？」

※荒木田 ああーっ」

河野 やっぱりそうだ。俺俺、河野っス。サッカー教えてた」

荒木田 「やあ、何の事でしょうっ」

河野 えーっ！忘れたんスか？つれないなあ」

章子 知り合い？」

河野 おお。前バイトで子供らにサッカー教えてたろ」

章子 ああ」

河野 ちよくちよくグラウンド使わせてもらったんだよ。幼稚園の」

長友 幼稚園？」

河野 だけのまき幼稚園。大学の近くにあった。…カンチョウ先生。久しぶりだなあ。

あ、すみません。貫一郎先生か」

長友 幼稚園で…え？」

荒木田 すいません。保育士やってました」

長友 は、経歴詐称かよ」

荒木田 すいません」

長友 道理で。ろくに交渉もできねえ訳だ」

河野 あれ？…俺、何かシクった？」

ユミ (長友たちに) どうでもいいからとにかく帰って」

ユミ、二階へ上がろうとする。

章子 あ、ちよっとー」

アヤが仏花を手に入れて入ってくる。

アヤ ただいまー」

荒木田 アヤさん…」

※長友 えっ」

※ユミ アヤ姉え」

アヤ 出ミっ……ぶっしたの一体」

ユミ ねえ、ぶっしたっ事っ」

アヤ はっ？」

ユミ アタシの部屋、何でその子が使ってるの？」

アヤ ああ、その事？」

ユミ 軽いな」

アヤ 後で話す。(荒木田たちに) あ、そちらは……」

ユミ 地上げ屋」

河野 えっ？」

アヤ 佐伯です。どういった「物件でしようか？」

長友 (名刺をアヤに渡す) 「こういう者です。既に耳にされているかとは思いますが、
「この度この地域」一帯を活性化しようという計画が進んでおります。「この計画を
成功に導くには、土地の有効利用を促進させる事が第一です。」

「この日の出通り商店街は、西に幹線道路と駅。東に国道という立地条件です。こ
の「一帯に東西に伸びる広い道路を建設し、幹線道路と国道を繋げば、車の流れ
はスムーズになり、道路周辺にショッピングセンターや商用ビル、オフィスビル、
駐車場など様々な施設が建設される。便利になったところで高い家賃に苦しん
でいる都心の企業を誘致する。そしてこの町の収益は上がっていく。これこそ」

アヤ それで、私たちに出て行けとっ？」

長友 まあ一旦そういう事にはなりますが、ビルができればテナントとして入って
頂くのも一つでしょう。土地というのは売り買いされて価値を生みます。

「この町に貢献する尊い決断だと思いますけどね。」

アヤ 「この商店街に価値はないという事ですか？私達が町の発展を妨げているとっ？」

長友 (笑)「そう感情的にならずに」

アヤ 感情的になんてなってません。でも、これだけは言えます。「この日の出通り」

商店街は戦後からずっとこの町を支えて来ました。「こ」は「この町の台所であり、

安らぎの場所です。私だけじゃない。沢山の子供たちが駄菓子を買ったり路地裏でかくれんぼしたり、親兄弟と風呂屋に行ったりしながら育ちました。

大人だって、買い物しながら話し込んだりお茶したり。ここはこの町の一部です。

あなた達には価値がなくても、私達にとっては古里なんです。お引き取り下さい

拍手しそつになる荒木田。

長友 荒木田

荒木田 あっ

長友 (手を出し) あれ

荒木田 あ…はい

荒木田、鞆から書類を出し、長友に。長友、それを開いてアヤに渡す。

長友 佐伯さん、「覧下さい。この土地の“現在の所有者”から預かって参りました」

ユミ、章子、河野、書類を見に近寄る。

章子 委任状？」

ユミ 松島商会？…え？…ここって加藤さんとこの土地でしょ

長友 加藤さんは、私どもの親会社である“松島商会”にこの土地を売却しました

一同ざわめく。

長友 どういう事で今後は手前どもに土地代をお支払い頂く事になります。

ま、持ち主が変われば土地に対する価値観も変わります。これまで通りの金額で妥当かどうか、検討しておる次第です。開発に向けてこれだけ注目を集めている地所です。値上げはあっても下がる事はないでしょうけどね

ユミ 汚い…」

長友 相対的なものですよ。土地の価値なんてのは。あなたは普遍的なものだと

思っておられる様ですが、それは幻想です。どうぞお納め下さい

アヤ、委任状を破り捨てる。

河野・荒木田 あっ

アヤ こんな紙切れで地主が変わったという証拠にはなりません。土地代はこれまで通り加藤様にお支払いします」

長友 そんな事したって受け取りませんよ。地主じゃないんだから」

ユミ 「いい加減にしてよ。警察呼ぶわよ」

長友 どうぞ呼んで下さい。ま、警察が口出せりやいいですけど」

男が居間へ入ってくる。

男 ヲミー！

ユミ マサユキー！

章子 兵頭さん

河野 え、誰？」

ユミ 二階へ上がろうとするが、男(兵頭)に止められる。

兵頭 ヲミ 帰って来い！

ユミ っっさい。放せっ！

アヤ ちよっと何っ？」

章子 離婚するらしいよ」

アヤ えっ！

兵頭 お前何言ってるんだっ

ユミ 「じょうがないじゃん。納得できないんでしょ」

兵頭 当たり前だよ」

ユミ じゃあ終わりだよ。アタシ絶対行くから」

兵頭 待ってっ！

アヤ 兵藤さん、どうしたのっ？」

兵頭 アヤさん、こいつ人事部長にそのかされて」

長友 あのちよっと」

ユミ 違っつて言っつてんじゃんー!」

長友 あのお話が途中になつてゐるんですが」

兵頭 誰だよ」

章子 地上げ屋」

兵頭 地上げ屋?」

荒木田 兵頭マサユキ……」

章子 (兵頭に委任状を見せ) これ。地主が変わつたんだつて。これからはこの人達に
土地代払えつて」

兵頭 フ、フハハハッこんな紙切れ一枚で俺を欺こつとは笑止千万! 町のゴミども!」

荒木田 あーっ!」

長友 ひっくりしたあ」

荒木田 俺を欺こつとは笑止千万! この喜八郎がきれいさっぱり掃除してくれるわ!」

長友 大丈夫か?」

荒木田 あなたは、兵頭マサユキさん?」

兵頭 「はあ」

荒木田 「掃除屋喜八郎」の?」

兵頭 「かにも」

荒木田 「やあ毎回楽しみにしています。(兵頭に握手を求め) うわあ感動だあ」

兵頭 「や「ちら」そ。こんなところで読者に会えるとは」

ユミ 何やつてんの? その人地上げ屋だよ」

兵頭 あ…(荒木田の手を離す)」

長友 荒木田」

荒木田 漫画家さんなんですよ! この方。僕す「いファン」で」

長友 帰るぞ」

荒木田 え、はい」

長友 (アヤに)佐伯さん、今日はこれで失礼します。土地代は必ずこちらへお支払い下さい。でない和不払いで退去して頂く事になりますよ」

兵頭 おぬじい」

長友 長友ですが、何か？」

兵頭 家賃はお前らには払わん」

長友 あなたこの家の方ですか」

兵頭 違う。でも親戚だ。今のところ」

ユミ 今のところな」

兵頭 家賃は」

章子 土地代」

兵頭 え、土地？」

章子 うん」

兵頭 土地代は、法務局に預かってもらう。供託という事だな。これで不払いにはならん。どうだーいっぺんの音も出まじい」

アヤ 「ユミに)そうなの？」

ユミ なんじゃないっ。そういっぺんの詳しいから」

アヤ きすが社会派」

長友 ぐー…」

荒木田 ぐーって」

長友 引き伸ばしたってどうにもなりませんよ。出直します」
長友去りかけるが

長友 あなた、兵頭さん？」

兵頭 「…おお」

長友 漫画家の？」

兵頭 ぞうだ」

長友 へえー…聞かないなあ」

兵頭 なっ…」

長友 (荒木田に) 行くぞ」

荒木田 はあ」

長友、荒木田、去る。

章子 何あいつ。ありがとう。兵頭さん」

兵頭 ハハ、朝飯前さ、これくらい。…あれ？ユミ？」

ユミは、二階へ上がってしまっていた。アヤ、仏壇の花瓶を取ると台所へ。

章子 あっお姉え、勝手なことしないで…(二階へ)」

兵頭 (二階へ) ユミ！帰って来いっ…」

ユミの声 うるさい！あんたこそ帰れ…」

河野、会社の書類を出して見ている。二階から靴や衣服が飛んで来る。

河野 あっ！俺の荷物！」

アヤが、花を生けて戻って来て、仏壇の鐘を鳴らし、手を合わせる。暗転

■二場 八月十七日 夕方

居間の片隅に纏められている河野の荷物。卓袱台で章子が何かの書類を見ている。奥の高み(別空間の丘の上)に、帽子を目深に被った中年の男が来て、携帯で電話をかける。佐伯家の電話が鳴る。

章子 はい。佐伯煙草店です。…もしもし？どちら様ですか？…もしもし…いい加減にしてよ。(電話を切る)

章子、書類を手に仏壇の前に座る。丘の上の男は見えなくなる。

スーツ姿の河野が荒木田と一緒にやってきて、店の鍵を開けようとする。

その気配に、書類を持って二階へ去る章子。

河野が6缶。バックのビールとレジ袋を提げて入って来る。レジ袋には洗面具や靴下。

河野 ヤッぞぞヤッぞぞ

荒木田 大丈夫？別に今度でいいよ

河野 大丈夫ですよ。みんな仕事行ってるから

荒木田 口ばらく貸しとくよ。明後日も面接でしょ？

河野 それは後輩に借りるんで

荒木田 アヤさんもいない？

河野 もう出かけてます。授業、夜だから。

荒木田 ホント？(入って来る)

河野 正がつて下さい。すぐ着替えるんで

荒木田 はい、いいよ

河野 (スーツを脱ぎながら) いや、荒木田さんに着て欲しいんもんがあるって

荒木田 ほん？

河野 浴衣

荒木田 え、何で？

河野 花火大会、誘いたいんでしょ。荒木田さん、浴衣持ってないって」

荒木田 ああ、でもねえまだ分かんないし。ていうか誘えないよ。多分」

河野 だめっスよ。そんな弱気じゃあ」

荒木田 だって、地上げ屋だよ。嫌われてんだよ」

河野 説明しますよ俺」

荒木田 へっ」

河野 荒木田さんだって被害者じゃないですか。騙されたんでしょ？普通の不動産屋だと思っただって就職したんでしょ」

荒木田 「さうだけど。まあタイミング悪かったんだよ。いつもそうなの俺。日の出不動産も、俺が入る直前に契約したらしいよ。松島と。それまで普通の不動産屋だったんだよ」

河野 でも」

荒木田 「いい、いい。“なんでそんな説明するの？”って疑問に思うでしょ」

河野 それも説明しますよ。荒木田さんはアヤさんに会いたくて日の出不動産に…」

荒木田 ちよっと待ってちよっと待って」

河野 えっ」

荒木田 急すぎる」

河野 ばっ」

荒木田 急がなくていいんだって。ゆっくり時間かけてさ」

河野 嫌われますよ。「そのままじゃ。どんどんどんどん」

荒木田 そうかもしれないけど…もっと遠まわし」

河野 「これ(ビールを指し) 飲みますっ」

荒木田 「や、まだ回るとあるから」

河野 そっか」

荒木田 あのとにかくさっきの話、アヤさんにはしないで

河野 まいッスけど。(スーツを脱ぎつつ) 荒木田さん、これ冷蔵庫入れてもらえますか？

荒木田 え、俺が？

河野 はい。そっち、台所なんで

荒木田 え…う、うん。…(ビールのパックを持って) じゃあ…

荒木田、台所へ去る。河野、着替え終え、靴下や洗面具を鞆の中に片付ける。

鞆の中の何かを探している様子。荒木田が戻って来る。

荒木田 きれいにしてるねえ。台所

河野 ああ

荒木田 きれい好きなんだ。思った通りだ。アヤさん

河野 あった。(鞆から浴衣を出し) これ、着てみて下さい

荒木田 夸？

河野 ええ

荒木田 え、脱ぐの？

河野 はい

荒木田 ええっ

河野 早く早く

荒木田 でも、誰か来ちゃったら

河野 そんなん5分もありゃ着れますよ

荒木田 着たことないからさ

河野 マジッスか！

荒木田 さっやっやって着るの？

河野 じょうがねえなあ。とりあえず脱いで

荒木田 うん…

荒木田脱ぎ始める。河野、服を脱ぐのを手伝ったり。

荒木田 何か恥ずかしいね

河野 そっすか？

荒木田 入んちで、服脱がされて…(笑) ドキドキするなあ

河野 荒木田さん？

荒木田 …？ 違う違う。変な趣味とかないよ

河野 (笑) パンツ、超かわいい

荒木田 やめてよ

河野 ハハハ

河野、荒木田に浴衣を着せて行く。

荒木田 ね

河野 ほっ…

荒木田 すいよね。あれ…(〇)等が入っている棚を指す

河野 ああ…全部アヤさんですよ

荒木田 へえ(棚の方へ行)こうとする

河野 動かないで

荒木田 ちよっとだけ

河野 あとあと

荒木田 「…」

河野 あの、あれお願いしますね

荒木田 え、部屋？

河野 ほい

荒木田 分かった。探しとく。1Kかワンルームでいいんだよね

河野 ええ…あ、でも

荒木田 何??」

河野 「応二部屋あると」も見てみたいんすよ」

荒木田 それは、章子さんと住むって事??」

河野 まあどうなるか分かんないけど」

荒木田 ちゃんと話し合った方がいいよ。就職も引越しもさ」

河野 そうですけど。聞いてくれなくて」

荒木田 「二部屋で敷金礼金なし?」

河野 ええ」

荒木田 あるかなそんなの…探してみるけど」

河野 お願いしますよ。アヤさんの方、協力するんで」

荒木田 う、うん。ありがと」

河野 おーし、これで帯を結んどと…」

跪き、荒木田の腰に抱きつく格好で帯を締めようとする河野。

章子が階段を下りて来て二人と目が合う。思わず荒木田から離れる河野。

帯が落ち、荒木田の前がはだけてしまふ。ややあつて、章子、台所の方へ去る。

河野 章子っ(台所の方へ)

荒木田(着物がはだけているのに気づき)いやんっ」

荒木田、浴衣を急いで脱ぐ。

河野の声 バイトじゃなかったっけ?」

章子の声 臨時休業」

章子、コーラを飲みつつ戻ってくる。続いて河野。荒木田、ハンズ一枚になっている。

章子、思わず噴出しそうになる。慌てて元の服に着替える荒木田。

荒木田 すいません」

河野 違っただよ。スーツ貸してもらったから返そうと思っただよ」

章子 で、何で浴衣着てんの？」

河野 花火大会」

※章子 え？」

※荒木田 それはっ」

河野 「や、行きたくね？ 花火大会。今年で最後なんだろ」

章子 最後だよ。そちらの地上げ屋さん達のお陰で」

荒木田 「すみません」

河野 遅う。荒木田さんも被害者なんだって」

章子 は？」

河野 覚えてるだろ。大学の近くにさ、たけのまき幼稚園ってあったじゃん」

章子 あったっけ？」

河野 あったよ。あそこの先生だったんだよ。荒木田さん。ね、カンチヨウ先生っ」

章子 何でカンチヨウ？」

荒木田 えつと…貫一郎だから？」

章子 は？」

荒木田 貫一郎って言うんです。荒木田貫一郎。年少さんがちゃんと発音できなくて…

カンチチロウ、カンチロウ、カンチオウ、カンチヨウ…で、カンチヨウ先生に」

河野 そうだったんだ」

章子 つまんない」

荒木田 え…」

章子 聞いて損した」

荒木田 そんな」

章子 で、地上げ屋にっ？」

荒木田 園が閉鎖されてまして。失業したというか。で、再就職したというか」

章子 地上げ屋に」

河野 やめるよ」

章子 筆記試験どうだったの？」

河野 ㇿ…まあまあ」

章子 へえ、こっちは大変だったよ。ラジオ局に侘び入れたり」

河野 『ごめん…でも勝手に予定決められても』

章子 (荒木田に) ねえ」

荒木田 はい」

章子 お宅でしょ？。パダン・パダンに変な客よこしたの」

荒木田 は？。」

章子 昨日の夜、これもん(顔に傷のジエスチャー) ばっか居座らせて。暴れさせて」

荒木田 知りませんよそんなの！。」 河野 そんな事あったの？」

章子 じゃ誰？ あんな嫌がらせて」

荒木田 私じゃないですって」

河野 そうだよ。荒木田さんはそんな人じゃない」

章子 何仲良くなってるの。アタシら立ち退かせ様としてんだよ」

河野 だから被害者なの荒木田さんも。荒木田さんはアヤさんに会いた」

荒木田 わーわー！！」

章子 づるさい！！」

荒木田 すいません」

章子 今、姉いませんから帰って下さい！！(河野に) よそで話しなよ」

章子、二階へ去る。

玄関の方で女の悲鳴。

荒木田・河野「え？」

ユミの声「二階から」もう何？さっきからー！」

河野 隠れて」

荒木田「え？」

河野、荒木田を押し入れに隠し、荒木田の靴や鞆も投げ入れる。

アヤが玄関から、ユミが二階から降りて来る。

アヤ もうやだ…」

ユミ うるさいなあ。こっちは徹夜明けなんですけど」

河野 アヤさん授業は？」

アヤ 今日休講だった」

河野 えっ」

アヤ さっしよ」

ユミ 何が」

アヤ 玄関先に。毛虫とかムカデとか、一杯バラ撒かれてて」

ユミ げーっ」

アヤ 掃除しないと押し入れを開けようとする」

河野、押し入れの前に立つ。

アヤ 「めん。ちょっと箒取りたいんだけど」

河野 俺やります」

アヤ 大丈夫よ。やるから」

河野 「や、こっついう事は男が」

ユミ おう。やれやれ居候」

アヤ ユミ」

河野 大丈夫ッス。任せて下さい」

河野、玄関へ行くようにする。

アヤ 尊は？」

河野 「知らないっス。(レジ袋を取り)これで」

河野、玄関へと去る。

アヤ 「…あれで掴むのっ」

ユミ つっ、気持ち悪い」

アヤ あんたまた朝までっ」

ユミ 取材と打ち合わせ」

アイ そりゃ怒るわよ兵頭さんだって」

ユミ あー、聞きたくない聞きたくない」

アヤ 早くウチ帰んなさい」

ユミ えー」

アヤ えーじゃないわよ。洋平君が可愛そうですよ。ずっと居間で生活させられて」

ユミ おかしくない？あたし家族だよ。あっちは居候」

アヤ 洋平君だって家族みたいなもんよ。店番してもらってるし。「っやって何かあれ

ば助けてくれるし」

ユミ でもそもそも、何で妹の彼氏を同居させんのよっ。おかしいよ」

アヤ ああっつっっ」

ユミ もらってないんですけどっせ

アヤ 何」

ユミ 部屋代、食費、その他もろもろ」

アヤ 「いわよそんなの」

ユミ 甘いおマヤ姉え」

アヤ 洋平君はね、色々あったの。だから」

ユミ 色々っつっ」

アヤ 住んでたアパートに、放火されて」

ユミ 「ジジでっ」

アヤ ちょうど寝入ったとだったのよ。通報がなかったらどうなったか」

ユミ 「へえ…」

アヤ お芝居で借金もあるみたいだし。そんな子からお金取れる？」

ユミ それはそれだよ。ウチだってギリギリでしょ。カルチャースクールの講師と煙草屋

って。大体儲けにならないでしょ。煙草屋は」

アヤ 大丈夫よ」

ユミ 先のこと考えなよ。いい？煙草屋なんて絶対続かない。値上がりしてからみんな吸わなくなったもん。ウチの会社なんか喫煙所までなくなっただし。

酒屋とかコンビニと兼業するならまだしも。こんな」

アヤ 「いから自分のこと考えなさい。とにかく家に帰って」

ユミ アタシ、ニ売った方がいいと思う」

アヤ 何言ってるのっ」

ユミ あの子達もいつか出てくのよ。アヤ姉え一人で煙草屋続けるの？立ち退き料

吊り上げさせてさ、住みやすいとこに越した方がいいよ。で、前みたいにバリバリ

仕事して」

アヤ 「いい。もう会社勤めしたくない」

ユミ 何で？あんなに打ち込んでたじゃん。あ、年気にしてるっ」

アヤ じゃなくて」

ユミ 大丈夫だよアヤ姉えなら。アタシ服飾関係の知り合い紹介したげる」

アヤ 「いの。ニは売らな」

ユミ 何でそんなにこだわるのっ」

アヤ あんた、もう一回考え直しなさい」

ユミ え…」

アヤ 海外赴任、アタシも反対。三年も行くなんて。それにあの人が決めたんでしょ」

ユミ あの人が…そりゃ決めるよ。人事部長なんだから。でも昔の関係とかじゃなくて純粋にアタシの」

アヤ でもね」

ユミ アヤ姉えだって仕事続けたかったでしょ。あん時母さん死ななきゃ、お店任せられてたんじゃない。…見返したいの。何も無かったみたいにアイツは人事部長に納まって。あたしだけ子会社飛ばされてさ。やっと戻って来れたのよ。アイツがくれたチャンスでもいい。無駄にたくないの」

アヤ でも兵頭さんの気持ちだって」

河野が、戻って来ていた。

河野 あの…(レジ袋をかかげ持ち)これ、庭に捨てても大丈夫ですかね」

ユミ 戻しそうになってトイレへ走る。

アヤ それ、さっきのアレっ」

河野 はい」

アヤ さっしりよう。庭に捨てるとまた這って来そうだし」

河野 ですよね…」

電話が鳴る。電話に出る河野。

河野 もしもし。…あ、ちょっと待って下さい。(アヤに)桑子さんです」

アヤ (代わって)もしもし…え、大丈夫？…そうなの…わかった。じゃすぐ行く。

(電話を切り)ちょっとパダン。パダンに行つて来る。それ、何とかして」

河野 はあ」

アヤ、出て行く。河野、急いで押入れから荒木田を救出。

荒木田 「、怖かったあ…嫌いなんだよっ。暗いと、狭いと」

河野 「そうですねですか」

荒木田 「たじゃないっ アヤさん」

河野 「すみません、今のうちに」

荒木田、玄関の方へ。

河野 「あ、これ適当に捨ててもらっていいっスか？」

荒木田 「河野からレジ袋を受け取り」？…いいけど」

ユミの声 「ああ、スッキリしたあ」

荒木田、店の戸口から出て、ビニールを開けつつ通りを去る。ユミが戻ってくる。

河野 「一日酔いっスか？」

ユミ 「まあね」

荒木田の声 「わあ〜っ〜」

ユミ 「むっ」

河野 「笑」何だろ」

ユミ 「アヤ姉はっ」

河野 「パダンパダン」

ユミ 「あそ。…青年、どうかね。就職活動は」

河野 「社、内定しました」

ユミ 「マジでっ？良かったじゃん」

河野 「ありがとうございます」

ユミ 「自立の日も近いな。頼むよ」

電話が鳴り、ユミが出る。

ユミ 「もしもし、佐伯煙草店ですが…もしもし、誰？…もう！電話を切る」

河野 「最近多いっスね、無言電話」

ユミ 「もう潮時だと思っただけだなあ」

河野 えっ？」

また電話が鳴る。ユミ出る。

ユミ むしむしっ……あんた誰っ……あ、ああ「めん。てか携帯にかけてよ。……え、

決まった？じゃすぐ行く。(メモを取りつつ)……うんうん。……ああ分かる分かる。

……了解。えっとー、三十分後に。じゃ

ユミ メモをちぎって二階へ上がろうとする。章子が壁のコーラを持って降りて来る。

ユミ おう、フリーター。今日も休みか？」

章子 うっさいな

ユミ (入れ違いに二階へ上がりつつ) 彼氏、内定出たってさ。結婚でもしちゃえば？」

章子 え……

河野 「第一志望じゃないけどな」

販売窓に客が来る。丘の上にいた中年の男。河野、対応しに行く。

河野 「おっしやいませ。何にまじまじうか？……ゴールデンバット。はい。えーっと

……(在庫を探すがなかなか見つけれず) あれ？」

章子 (客に) 少々お待ちください
河野 あ……

章子、椅子を台にして上の棚からゴールデンバットを取り、客に渡そうとする。

章子 「……いない」

河野 えっ……何だよ。ちょっとくらい待てっーんだよな

章子 在庫の場所くらい覚えてよ

河野 「めん。……あの、俺さあ」

章子 その会社には洋平のやりたい事あるの？」

河野 え……まあ……でもほら、第一志望じゃないんだって

章子 第一志望の会社にはあるの？」

河野 「……多分、ありそうな気がする……」

章子 何？やりたい事って」

河野 「取り敢えずやってみないとね」

章子 潮時かもね。そろそろ」

河野 え？」

章子 あたし達」

河野 ちっぴいじやん」

ユミが鼻歌を歌いながら二階から降りてくる。

章子 ちよっと出てくる(玄関の方へ去る)」

ユミ あれ、章子は？」

河野 きあ」

ユミ あのさ、今日も帰れないから。アヤ姉えに言っといてよ」

河野 「..」

ユミ ぞした？」

河野 あ、はご」

ユミ、去る。河野、台所の方へ。また電話が鳴るが、誰も出ない。

河野、缶ビール手に戻って来て、卓袱台へ。一人ビールを飲む。

河野 「……ちくしよー」

暫くして、オーディオ棚のCDを物色し始める。店の戸口からアヤが帰って来る。

アヤ ただいま」

河野 (手を止め) あ、すみません。お帰りなさい」

アヤ 「このよ。何でも聴いて」

河野 「や……」

アヤ 「人で酒盛り？」

河野 はい。飲みます？」

アヤ さっしよ。もらおうかなあ

河野 はい(台所へ)

アヤ、棚から一枚CDを取り出し、かける。ブルースが流れてくる。河野、ビールを
持って帰ってくる。

河野 おお、シン「……」

アヤ 暗いっ

河野 「や、いいッス。バーに居るみたいッスね」

アヤ (笑って缶ビールを受け取り) ありがとう

小さく缶をぶつけ合い、ビールを飲む二人。

河野 おっ、いい飲みっぷり

アヤ むっ(笑)

河野 桑子さん、大丈夫でした？ 昨日色々あったって

アヤ むっね、お店の椅子もテーブルもむちゃくちゃ。窓も割られて

河野 ひどいなあ

アヤ 警察来てただんだけど、現行犯じゃなきゃ取り締まれないとか、民事不介入
だとか言っって何もしてくれないし

河野 民事不介入？ 何スか？

アヤ 結局、大家と店子の問題だから。地上げの話って

河野 はあ

アヤ そっつうのは民事だから、警察じゃ手え出せないって

河野 そうなんスかー！

アヤ うん。本当に暴力振るわれたり、物壊してるとこ押さえないと何もできないって

河野 それじゃあ遅いじゃないスかっ

アヤ そっつよ！…もういい。明日弁護士に相談しに行くから。…洋平君はっ

河野 え？」

アヤ 就職活動」

河野 「社、内定が出て」

アヤ そう。よかったじゃない」

河野 まあ」

アヤ 《缶どっしをぶつけて》おめでとーっ」

河野 ども…」

アヤ 元気ないなあ」

河野 アヤさん」

アヤ ㇿ？」

河野 俺って魅力ないッスか？」

アヤ 何急に」

河野 思った通りでいいんで。どうですか？」

アヤ ええ…そうだね。優しいし、頼りがいがあると、思うし。あと、スマートだし」

河野 男として、どうスか？」

アヤ そんな事言われても…素敵だと思っけど」

河野 そうかな」

アヤ ㇿっしたの？」

河野 自信ないんスよねえ。学生の頃、俺、章子にめっちゃめっちゃ頼りにされてたんスよ。

いつでも、「先輩あいつっつって追いかけてきて…でも、今じゃ俺の方が着いてけな

いっつーか。置いてけぼりっつーか」

アヤ そうかな」

河野 章子、ラジオドラマ書いたんです。で、ラジオ局行った先輩に掛け合っって、放送

決まっって」

アヤ す「……」

河野 短いのですよ。十五分くらいなの

アヤ それでもす「……」よ。言ってくれば「……」

河野 負い目感じてゐるから。アヤさんに

アヤ なんで？

河野 自分ばっかやりたい事やってるって

アヤ そんな

河野 アイツが勝手に思ってるだけです。あ、言わないで下さいね

アヤ うん……

河野 何か俺を、キャストに推したらしくて。でも俺断っちゃって。試験あったし

アヤ 今日だったの？

河野 ええ、今日収録で。でもホントはビビってたんです。だから断ったんです。

ラジオなんかやった事ないし。プランクあるし。怖くて

アヤ 「……」

河野 最悪ッス

アヤ そんな事ない。そんな事ないよ

河野 必要ないんすよ。アイツには。芝居やらなくなった俺なんか

アヤ 「ラッ、しっかりしなさい」

河野 「……」

アヤ アタシはね、洋平君があの子と居てくれてす「……」感謝してる。ああいう子でし

よ。頑固でややこしくして。洋平君みたいに、「う、ふわっと包んでくれる人が居な
きゃダメなの。絶対必要だよ。洋平君は」

河野 「……」マジすか

アヤ マジすよ

二人、笑う。

アヤ やっぱ曲変えよ(別のCDを探し始める)

河野 もう一本飲みます?」

アヤ もっといいのがあるよ」

河野 え?」

アヤ ちよつと待って。えつと(…)CDを一枚渡し(「これ、お願い」

アヤ、台所の方へ。河野、渡されたCDをかける。ノリのいいソウル。

縛らしくして、ワインとグラスを持って戻って来るアヤ。

河野 あ、それ」

アヤ そ、野村酒店の置き土産」

河野 不エーイ」

二人、注ぎあつて飲む。河野、オーデイオ棚を見て

河野 「これ、全部アヤさんのですか?」

アヤ CDはね。レコードは父が集めたの」

河野 へえ。洗い人だったんだ。お父さん」

アヤ 渋くない渋くない。モッサイよ」

河野 え?」

アヤ 汗っかきで…暑苦しくて。夏なんかステテコのまま庭に出て水播きするし。

やめてって言っても聞かないの」

河野 (笑)へえー、話合いそうだな。生きてたら」

アヤ ぞうだろ。ま、いい人ではあつたね。善人丸出し」

河野 丸出しって」

アヤ 裏切られても自分は裏切らない。損するタイプ?」

河野 ふーん……(にやけている)「

アヤ え、何？」

河野 アヤさんって好きな人とかいます？」

アヤ (噴き出し)「は？」

河野 どうなんスか？」

アヤ 「想像にお任せします」

河野 「ユ、思わせぶり」

アヤ (笑)「いる様に見える？」

河野 「ないんですか？」

アヤ 何よもう」

河野 もうすぐ花火大会ですねえ」

アヤ ああ」

河野 行くんスか？今年で最後でしょ」

アヤ 行かない」

河野 何で？」

アヤ 入こみ嫌いだから」

河野 えーっ、今年は行った方がいいッスよ」

アヤ 何で？」

河野 でか、行きますよ」

アヤ は？」

河野 俺、予知能力あるんですよ」

アヤ (爆笑)「何それ！酔っ払ったの？」

河野 ホントですって。(アヤの顔の前で手をゆらゆらさせ)花火大会の
前に、誰かがアヤさんを迎えに来ます」

アヤ (笑)「何言ってんだか」

河野 「これは、運命。そう運命の人に違いない……おおっ見えて来たっ」

アヤ ほれもつと飲んで」

河野 (聞かずに) 見えて来た」

アヤ もつ」

河野 だんだん顔が見えて来た」

アヤ (爆笑)「

河野 おっ、おっ、見えてきた見えてきた！その人の名はっ」

アヤ、河野の手を払う。沈黙。出前帰りの内藤が、鼻歌を歌いつつ表を通る。

アヤ 飲まないの？(ワインを勧める)「

河野 「頂きます…あの、俺なんか……」

アヤ 洋平君、もつと楽しい話して」

河野 楽しい話？楽しい…あ、そうだ。花火大会って言えば」

アヤ また予言？」

河野 「や、章子の子供の頃の話。アイツよくお母さんと二人で花火大会行ったらしくて。アヤさん達は家出ちゃったんでしょ。割りと早く」

アヤ そうね」

河野 花火大会の日に、夕方から鳴る…あの、お知らせ花火」

アヤ お知らせ？」

河野 空砲？ポーン、ポーンって。あれが鳴り始めると、お母さん数えるんですって。で、アイツが何してんの？て聞いたら「あれが5回鳴ったら父さん帰ってくるよ」って言うんですって(笑)「

アヤ 「……」

河野 アイツもよく一緒に数えたって。でも毎年帰って来なくて。帰って来ないじゃーんって言うと、お母さんも「そだねー。行こっかあ」って言って。それから二人で

出かけるんだって」

アヤ 「:そう」

河野 醜だよねえ。んな事言われたら生きてんのかと思っちゃっしょーんって…すいま
せん。結局暗い話に…」

アヤ、ワインを一気に飲み干すと、フラフラと店の方へ降りていく。

河野 アヤさん」

アヤ、商品の帽子をかぶり、振り向「ううとしてよろめく。

河野 大丈夫ですか！（店へ降りて走り寄る）」

アヤ 大丈夫大丈夫…洋平君」

章子が居間へ戻ってきて二人を見ている。

河野 はい」

アヤ あたしね」

突然、表で何かが破裂する音。二人、思わず抱き合う。破裂音立て続けに。

河野 「:何だろ」

章子 「CDを止め）ただいま」

慌ててアヤから離れる河野。

どこからか、大音量で軍艦マーチが聞こえて来る。アヤ、表へ飛び出して行く。

河野 お帰り」

章子 飲ませたの?」

河野 ち、違つ。ビールは俺だけど、そっちはアヤさんが…:え、何?…何その沈黙。
何その斜め四十五度(笑)。…:片付けるわ」

河野、卓袱台を片付けて台所へ。章子、二人が抱き合っていた方を見ている。 暗転。

■三場 八月二十日 昼下がり

蝉の声。スーツ姿のユミ、トストスと足音をさせ玄関の方から来て二階へ上がる。

風鈴が鳴る。通りに長友と荒木田がやってくる。

長友 荒木田あ

荒木田 はい

長友 背水の陣だぞ

荒木田 はい

長友 もう後へは引けない。いいな

荒木田 「はい」

長友 間が空いたぞ

荒木田 そんな事ないっス

長友 頼むよ荒木田あ…さん。年上なんですよ？」

荒木田 「や」

長友 「や昨日知ってさあ、びっくりしたよお。すみせんタメロきいちゃってえ」

荒木田 「っしか違わないし」

長友 気持ち悪リイから、「のままでいいよな」

荒木田 はい

長友 ひゃ。(出て行こうと)

荒木田 え、行っちゃうんですか

長友 当たり前だろ。明日で終わりなんだよ。契約打ち切り。ね

荒木田 はあ

長友 目一杯動かなくてどうすんだよ。見返してやろうぜ。松島をさあ。一週間も

早く打ち切りやがって。何が成績不振だよ

荒木田 ですよね

長友 確かに成績不振だけだな。あんたが一人前にやったりや、こっちはならなかったのよ。違っっ」

荒木田 申し訳ありません」

長友 おおー。責任感でいて、ロシッとちってくれよ」

荒木田 はい」

長友 ひゃな。(出て行く)」

荒木田 あ、ながと……どうしょ。……あの、すいませ〜ん(誰も出てこない)……だめだ」

荒木田、店の戸口から去りかけると、河野が走って入ってくる。

荒木田 あ」

河野 荒木田さん」

荒木田 やっつしたの？」

河野 や別に……え、荒木田さんは？」

荒木田 えっとお……」

河野 あ、物件？」

荒木田 ああ、そうそう。(鞆から間取り図の束を出し)「これ、渡そつと思っって」

河野 ありがとうございます……へえ思ったよりあるな」

荒木田 まあ、ちよつと離れた駅のも持って来ちゃったけど」

河野 (間取り図を見ながら)……家賃、5万8千円か。……これ5万になります？」

荒木田 ええっ」

河野 「や、やっぱ4万5千円」

荒木田 無理だよおー」

河野 交渉してみてくださいよ」

荒木田 ええ〜」

河野 お願いします」

荒木田 もう〜」

河野 「別の間取り図を見て）2DKか。広いな」

荒木田 「いいでしょ。駅からちよつと遠いけど。徒歩…二十分か」

河野 「チャリがありや何とかなるな」

荒木田 そうだね。アハハハ」

河野、間取り図に見入っている。

荒木田 ひゃあ検討しといて。いいのあったらまた持ってくるよ」

河野 はい」

荒木田、去る。桑子が来て、表で荒木田とすれ違う。

桑子 また来てたの？ 地上げ屋」

河野 「資料を片付け）いや地上げの話は」

桑子 ねえ、シヨコたんいる？」

河野 あいつ、夕べから帰って来ないんですよ」

桑子 え？…そう…」

河野 何かあったんですか？」

桑子 知らない知らない。…あれだよ。友達のとこじゃない？ そんなに心配しないで」

河野 でも最近物騒だから…隣、空き家になってから変なのいっぱい居る」

桑子 大音量で軍歌流すしね」

河野 章子に何かあったら…」

桑子 え、まさか…探す？ 心当たりは？」

河野 もう当たってみました。…ダメだ。やっぱり警察」

河野が電話の方へ行こうとすると、章子が店の戸口から入って来る。

章子 あれ？クワちゃん」

河野 章子っ」

桑子 シヨコたんっ」

河野 「さ」行ってたんだよ」

章子 友達んち。飲んでて遅くなつて」

河野 誰だよ友達つて」

章子 誰でもいいじゃん(二階へ上がっていく)」

※河野 おいっ」

※桑子 ショ」たん、昨日の話なんだけど…」

章子 (河野を気にして)「ごめん。それ今度にして」

桑子 (同じく河野を気にして)「あ、うん」

河野 え、何それ」

章子、二階へ上がっていく。

河野 ちよっ、待てよ」

章子の声 疲れてるから」

河野 おいっ…あれだぞ。何でもないぞ、アヤさんとは」

桑子 何？アヤちゃんとして」

河野 何でもないですよ…(二階へ上がって行く)」

桑子 ちよっ…」

取り残される桑子。販売窓に帽子を目深に被った男が来る。

桑子 あ、(二階へ)「ねえ！お客さん…ねえ…(反応なし)「しょうがないなあ。……」

お待たせしました。何になさいますか？…「ゴールデンバット。はい…えっと、確か

…(上)の棚から「ゴールデンバットを取り値段表を確認はい。「こちらがえーと、

二百円です。ありがとうございます」

客、無言で金を払って去る。桑子は販売窓の椅子に座り、外を見たまま固まっている。

風鈴が鳴る。

桑子 「…」

二階から、着替え終えたユミが降りて来る。

ユミ あ、クワちゃん！聞いてよ。アイツ会社まで来てさ、人事部に乗り込もうとしたのよ。頭おかしいよホント。呼び出されて受付行ったら羽交い絞めにされてんの、警備員に。勘弁してくれっての。もう決心ついた。別れる！ねっ」

桑子 あ、うん」

ユミ 軽っ…何？アヤ姉だったらまだ帰んないよ。…あー怒り過ぎてお腹減っちゃった。クワちゃん、お昼済んだっ」

桑子 まだ」

ユミ 何か食べない？ラーメン食べよっか。ね、出前取っちゃお。お、このから。(電話をかけた) 何がいい？クワちゃん」

桑子 えっ」

ユミ ラーメン、何にする？」

桑子 何でも」

ユミ あそ、電話をかけ…あ、すみません。東五軒目の佐伯煙草店ですけど。…どももお、あの出前お願いします。…味噌ラーメンどう。あと、えー…餃子2人前。…はい。お願いします」

桑子 何時ごろ帰んのかな。アヤちゃん」

ユミ ああ…6時には帰るんじゃないっ」

桑子 6時か…」

ユミ あれ？弁護士？」

桑子 えっ」

ユミ お店の事相談するんですよ。アヤ姉言った。警察じゃ何もしてくれないって」

桑子 ああ」

ユミ あたしさ…その、怒らないでね。ホントはもう潮時なんじゃないかと思ってるの。

立ち退き。だつて先の事考えたらね
「ね」

桑子 『めん。ちよつと用事思ひ出しちやつた(走り出て行く)』

ユミ えっ、クワちゃん！やだ怒ったー？

ユミが後を追う様に戸口へ向かうと、荒木田が顔を出す。

荒木田 あの一…」

ユミ わっびっくりした

荒木田 あ、すみません」

ユミ 何？…て地上げの話しかねえか

荒木田 やっぱりいいます

ユミ え？婦んの？

荒木田 「帰りません」

ユミ ちいぢだよね

荒木田 ア、ア、アヤさんはいっしょにやるでし「ね」か？

ユミ 武士か

荒木田 あ、あ、(口を叩いたり)

ユミ 「なごよ」

荒木田 では帰りまする(去ろうとする)

ユミ ちよつと待てー

荒木田 はい？

ユミ 中がって

荒木田 え…でも

ユミ 「いから。アタシが話聞かわ」

荒木田、ユミに促されて居間へ上がる。

ユミ 率直に言うけど、こないだ聞いた額じゃ納得できないわよ。立ち退き料

荒木田 あ、少し変更が…」

ユミ あぶそっ」

荒木田 先日は百五十万と申し上げましたが、更にお引越し後の家具代や生活資金も

「考慮してプラス五十万。全部で二百万円お支払いします」

ユミ それでギリ？」

荒木田 え…」

ユミ ギリギリ一杯？」

荒木田 はいっ」

ユミ じゃ、別んどこ」と交渉すっか」

荒木田 え、あの」

ユミ ぐ？」

荒木田 「実費込みで五百万じゃダメですか？」

ユミ 五百万？」

荒木田 すいません。うちで交渉させて頂ける上限は五百万円です」

ユミ ほんとにそれでギリ？」

荒木田 はい」

ユミ うそっ、もっといけるでしょ」

荒木田 ホントにギリです」

ユミ ホントっ」

荒木田 ホント」

ユミ 絶対っ」

荒木田 絶対」

ユミ 命かけるっ」

荒木田 かける」

ユミ 「…え、マジで？ 交渉ってちよつとずつ譲歩してくもんじゃない？」

荒木田 そついうの苦手なんで」

ユミ 「…分かった。姉はアタシが説得する」

荒木田 ホントですか？」

ユミ うん。でもああ見えてすごい頑固だからね。結構時間かかると思っけど」

荒木田 明日までなんです」

ユミ え？」

荒木田 ウチが交渉できるの。明後日にはここから手を引いて」

ユミ せうなんの？ そしたら」

荒木田 別の業者が来ると思います」

ユミ 別の業者……」

ユミの携帯が鳴る。

ユミ (電話に出て) はい。…ゲラ？ ああ、昨日の？…うん。アタシがリライトした。

え？ちよつと待って。(荒木田に)ごめん。ちよつと待ってて…ごめんね。今確認す

る(二階へ去る)

荒木田、汗をふきつつ待つ。が、ふとオーデイオ棚へ。棚から何枚かのCDを手に取る。

荒木田 すい…黒人ばかりだ…」

店の戸口から兵頭が入って来る。思わずCDを落とす荒木田。

兵頭 アイツいる？」

荒木田 えっ？」

兵頭 ヨミ。いるんだろ」

荒木田、二階を指す。兵頭、二階へ。内藤が岡持ちを持って通りをやって来る。

荒木田 フフ…兵頭マサユキ…」

二階へ去る兵頭を見送りながら一歩踏み出す荒木田、落としたCDを踏んでしまう。

内藤が、店の戸口から入って来る。

※荒木田 ああーっ！

※内藤 ごんには、来来軒ですー。…どしたの？

荒木田 何でもない何でもない

割れたCDを鞆に隠す荒木田。

内藤 ラーメン持てきましたー

荒木田 え？

内藤 味噌ラーメンふたちゅ、ギョーザふたちゅ。千七百六十円ね

荒木田 「僕じゃないです」

内藤 え？

荒木田 頼んだの

内藤 誰頼んだ？

二階から、ユミと兵頭が言い争いながら降りてくる。

兵頭 待てよ

ユミ 離せっつ

兵頭 説明しろよ！何でああいう態度取るんだ。あれが身内に対する仕打ちか？

警察呼ばれたんだぞー！

ユミ 呼ばれて当然でしょ。何の連絡もなく来て騒いで

荒木田 あの

兵頭 な、俺言ったんだぞ。夫だつて。お前“知りません”つつたろ。何で夫ですつて

言わないんだ

ユミ 言えないわよ。格好悪くて。あたしのメンツ潰す気？

荒木田 あの

兵頭 お前が話聞かないから

荒木田 あの手いけません！

ユミ 何？！

荒木田 「や、この人が…」

内藤 まいど。来来軒です」

ユミ 内藤さん」

内藤 お待せました。味噌ラーメンふたちゅギョーザふたちゅ千七百九十円ね」

荒木田 三十円上がった」

内藤 間違えた。千七百六十円ね」

兵頭 え、お前出前頼んだの？この非常時に。俺が警察で無実晴らしてる最中に」

ユミ 「…」

兵頭 ゆうゆうと飯食おつてか！

ユミ 頼んでない」

内藤・荒木田 え？」

ユミ (荒木田を指し) この人が頼んだんじゃない？」

荒木田 ちよつとお…」

内藤 (荒木田に) やっぱリアンタ。はい払って」

荒木田 違いますよお…」

内藤 じゃ誰か！

兵頭 (ユミに) お前だろ」

ユミ 違います。…何かの間違いよ。大体、一人で二つも頼まないし」

内藤 ウソよ。私ちゃんと聞いたよ。東五軒目のサエキ煙草店。ここですよ。間違い

しないよ」

ユミ わかたわかた。(財布を出しつつ) 払うから。持って帰って」

内藤 アイヤー！何それ。私まちがたいうか！頼んでない言うか！

兵頭 ああ、すいませんあの

内藤 「いい。お金いららない。アンタ達バカよ」

荒木田 バカって

内藤 バカよ。日本人みなサイテーよ。お前らみなヤクザに地上げされる!

内藤、出て行く。遠くで犬が盛んに吠える。元来た道へと去る内藤。

ユミ やっぱ日本人じゃないんだ

兵頭 おい、あれはひどいぞ

ユミ 「ここから帰って二階へ」

兵頭 あ、待って」の追っ」

ユミの声 もう別れるっ」

兵頭の声 バカッ」

通りの向こうで激しくぶつかる音。内藤と長友の悲鳴。

長友の声 アチッ! 何すんだ馬鹿野郎!

内藤の声 飛び出すあんたバカよ! 日本人みなバカよ!

長友の声 何だと!」

犬の吠え声。長友が慌てて駆け込んで来る。頭からラーメンを被っている。

長友 ちっそー日本人なめやがって。今に見てろよ

荒木田 長友さんっ大丈夫ですか?(ハンカチを渡す)

長友 (ハンカチで頭をふきつつ) 最悪だ。厄日だ今日…ああ、頭おかしいぞあの女

荒木田 女?」

長友 バタンパダンの女だよ

荒木田 クワコさん?」

長友 あいつ、男に犬をけしかけてさ

荒木田 男って?」

長友 知らねえよ。他の地上げ屋か何かだろ」

荒木田 ああ」

長友 「にしても犬に襲わせるか？犯罪だぜ。相手の男、手から血い流してさ」

荒木田 ええーっ」

長友 俺アツって声出しちゃったんだよ。したら今度は俺にけしかけやがって。

もう怖くて。犬嫌えなんだよ」

荒木田 (長友の背を撫で) よしよしもう大丈夫。大丈夫ですよお」

長友 (その手を払いのけ) やめろっ。で、どうなったんだ」

荒木田 ほっ」

長友 契約」

荒木田 アヤさんとはまだ。でもユミさんが。次女の。あの人が説得してくれるって」

長友 ほお」

荒木田 でも時間かかるって」

長友 何いー」

荒木田 何とか明日までに説得してもらおうと思って」

長友 そりゃそうだ」

二階から兵頭たちの言い争う声

荒木田 今、取り込み中で」

長友 何だ「この家はいつもいつも」

荒木田 「長友さん…長友さん」

長友 あっ？」

荒木田 (割ったCDを見せ) これ…」

長友 何それ」

荒木田、オーデイオ棚を指す。

長友 え？「」の？」

荒木田 「うなづく」

長友 割ったの？」

荒木田 「うなづく」

長友 (荒木田を叩き) ばか！

荒木田 やっしましよう

長友 戻しとけよ

荒木田 えーっ

長友 何だよ。見られたのか？割ったと

荒木田 割ったとじゃないけど、触ったとこは見られたかも

長友 分かんねえよ

荒木田 じかし…割れたまま戻すというのは

長友 じゃあ中古屋で買えよ。おんなじの。今度、割れてない方入れとけ

荒木田 なるほどー

長友 それはいいんだ

荒木田 どのにありますかね。中古屋

長友 駅向こうにあるよ

荒木田 どの？ 教えて下さいっ

荒木田、鞆からメモを取り出す。

長友 ちよつとお、何よこんな時に

荒木田 お願いしますっ

長友 むゝ。…駅向こうの大通りまっすぐ行って、のんき亭っていう定食屋さんどこ左

曲がつて、んでまたまっすぐ行って

荒木田 むっちちよつとゆっくり

長友 「ため息…駅向こうの…大通りまっすぐ行って」

荒木田 「メモを取りつつ」 駅向こうの…大通りを…まっすぐ」

長友 そう。で、定食屋の…のんき亭」

荒木田 定食屋の…のんき亭…のんき、平仮名ですか？」

長友 うん…で左へまっすぐ…すつと澤の井中学っつーのがあって」

荒木田 スットサワノイ中学……どついつ字でしようか？」

長友 貸せっー(メモをひったくり) 何だよもう」

荒木田 すいません」

長友、よく分からないウォーミングアップを軽く。ペンを持ちサクサクと地図を書き始める。その姿には何らかのプロっぽさがにじみ出る。荒木田、長友に近づいて地図が描かれて行くのを見守る。

荒木田 「早いなあ」

長友 「！ 近いよお前」

荒木田 上手いですねえ、地図描くの」

長友 たいした事ねえよ。「んくらう」

荒木田 あ、これ知ってる。とん平焼きの店。わあ、絵も上手い」

長友 ばあか」

荒木田 なさってたんですか？ 絵を描く仕事とか」

長友 別に。…それより、次女とどついう話になったの？」

荒木田 え、ああ。五百万なら説得してくれるそうです」

長友 ほう。五百万ね。…(描きながら)「ん、心臓破りの坂っつのがあって」

荒木田 ほう」

長友 ぞこ上りきって細い路地右行くと呉服屋。その向かいが、中古レコード屋」

荒木田 ほう。いやあしかし上手いなあ」

長友 (笑) 中古レコード屋の流行堂と…で、五百万ねと。(地図を描き上げる)

何いっ…」

荒木田 ひっ」

長友 バカかっ！(メモを投げつける)」

荒木田 え？」

長友 五百万払ったらウチの取り分ねえだろっ」

荒木田 でも背水の陣」

長友 もういつ。俺が交渉し直す！」

河野が二階から走り降りてくる。

河野 あ、いた。荒木田さん、あの物件見に行けます？これから」

荒木田 え？」

長友 物件？」

河野 ZDKの」

荒木田 「や、今日は…」

河野 お願いします！」

河野また二階へ去る。

長友 何の話？」

荒木田 引越し先探すの頼まれて」

長友 何でそんな事やってんだよ。」

荒木田 不動産屋ですから…」

長友 何様だよ！ろくに交渉も出来ねえ癖に。目の前の事片付けてから」

長友、二階から走り降りて来た、ユミ、続いて兵頭に跳ね飛ばされる。

長友 ぐえっ」

荒木田 長友さんっ」

ユミ もうイヤ。絶対別れるっ」

兵頭 落ち着け。悪かったよ今日の事は」

ユミ 今日の話だけじゃない。ずっと我慢して来たの。アタシは」

兵頭 えっ」

ユミ 結婚する時アンタなんだった？ 昔の事は全然気にしてない。俺はそんな小さい男じゃないって言ったよね」

兵頭 でも」

ユミ 言ったでしょ。なのにグググググググ。アタシはただちゃんと仕事をした
だけのの。チャンスを不意にしてくれないの」

兵頭 ひやあ言うけどな。お前だって言ったろ」

ユミ 何を」

兵頭 晩飯作る暇はないけど、朝はちゃんと作る。洗濯は私がやるわって」

ユミ うっ」

兵頭 晩飯どころか、朝飯だって作った事ないだろう」

ユミ あるよー！二回」

兵頭 『二回で偉そうに言うな！俺は朝屋晩全食作ってる。お前がいつ帰ってもいい様に
夜食も作ってたぞっ」

荒木田 えーっ」

兵頭 洗濯も俺がやってるっ」

ユミ だって仕事が不規則で」

兵頭 俺が家で仕事してるからって甘えんじゃねえよ」

長友 あんたらさあ」

ユミ 何言ってるのよ。アタシが働いてるからやってけんのよ！アンタの原稿料だけで
食えないじゃない」

荒木田 そっという事は」

兵頭 お前なあ

ユミ 言ったまいで思ってたけど、「」の際言わしてもらうわ。アンタの倍よ。アタシの年
収…アンタなんか「モじゃん…」

兵頭 何いっ

長友 ちよつと聞いてるっ(ユミの肩に触

ユミ 長友の手を払い) 海外には行って欲しくない。でも仕事はしてもらわないと困る。
そういう事でしょ

兵頭 じゃあ仕事辞めろよ。俺一人でやってやるよ

ユミ はっ、連載一本で？それも打ち切り寸前じゃん

荒木田 もっそのくらいに

ユミ 流行ないんだよ。社会派なんて。行き詰ってるクセに

長友 やめろやめろ！漫画なんか

兵頭 何い！

兵頭、ユミに掴みかかろうとする。荒木田が間に入る。

ユミ (長友を指差し) その人が言ったじゃん！

章子、続いて河野も降りて来る。章子が出て行こうとするのを必死に止める河野。

河野 待て章子！荒木田さん！

荒木田 (ユミと兵頭の間で揉まれながら) 何？

河野 部屋、見せて下さい。これからユイツと行きますからっ！

章子 行かないっつってんじゃない

荒木田 今取り込んでるからっ

河野 何でだよ。俺の何がそんなに嫌なんだよ

章子 むっいいい！

章子、河野から逃れて、二人で長友を挟む格好に。

長友 おいおいおい

河野 よくないよ。俺お前の為に就職するんだよ。お前が好きな事できる様に。

それが何でダメなんだ。あれか。芝居してなきや俺なんかいらねえのか！」

長友が避けようとする方向と河野が進もうとする方向がごとごとく一致。

章子、玄関の方へ去ろうと。長友、河野になぎ倒される。

河野 待てよー！

長友 お前ら！いい加減にしろよー！

一同 地上げ屋「いたんだ」など

長友 今どいう状況か分かってんのか！喧嘩してる場合じゃねえだろー！

ユミ 「何よ偉そうに」

長友 うるさい！あのな、こは、この日の出通り商店街は9月には更地になります

兵頭 そんな事はさせんー！

長友 『させん』じゃねえんだ。なるの。もう決まってるの

兵頭 脅したって無駄だっ

長友 脅しじゃねえさ。俺ら日の出不動産は明日で交渉終わり。契約打ち切り。

でもな、これから来るやつは甘くないぜ。あんたら昼も夜もオチオチしてらんね

えぞ。いつ炙り出されつかしんねえしよ。俺らに売れよ。その方が身の為だぞ

兵頭 脅迫だ。これは立派な恐喝だ。河野君、警察っ

荒木田 長友さんっ！

長友 慌てんな！あれか？証拠でもあんのか？警察来た時、俺がアンタら脅して

たつて証拠出せんのか？

兵頭 めっそー、録音しておけば…

長友 (笑) 人の事より自分の頭の火の粉を払えよ

兵頭 何だと

長友 社会派かなんか知らんけど(ユミを指し)この人の言う通りだ。流行んねえよ

兵頭 な…

荒木田 そんな事ないですよ。兵頭さんの漫画は面白い」

長友 面白くねえよ」

兵頭 貴様っ」

荒木田 失敬なっ」

長友 やめちやえやめちやえ漫画なんかっ。何の役にも立たねえ（河野に）兄ちゃん、

アンタは正しい。早く就職しろ。人様の役に立て。芝居だ漫画だなんて言ってる

奴は社会のクズだからな」

兵頭 「長友につかみかかり）コノヤローっ」

二人、揉みあう。

長友 なんだよ」

ユミ マサユキっ」

兵頭 お前こそっ」

荒木田 長友さん、やめて」

長友 お前こそ何だよっ」

河野 やばいッスよ」

兵頭 お前こそクズじゃないかっ！人から住むところ奪って！何の役に立ってるって

言っんだ！」

長友 地域の活性化！土地の有効利用だよ！」

兵頭 お前になんか分かるか！モノを作る苦しみも喜びも知らない癖に！

お前なんて生きる屍だ。お前にクズ扱いされる筋合いはないっ！」

長友 上等じゃねえか。表出ろこの野郎っ」

兵頭 望む所だ。このヒョウロクダマがっ」

※荒木田 ためですよ長友さんっ」

※ユミ マサユキ、やめなっ！」

二人いがみ合いながら表へ出る。と、突然犬が吠えたてる。

長友・兵頭 うわあっ！」

一目散に逃げる二人。奥の高見別空間の丘の上に帽子の中年男が登ってくる。

痛そうに手を押さえている。

ユミ 大丈夫かな…」

河野 「『ヨウロクダマ』って言う人初めて見た」

荒木田 (ユミに) すいません」

ユミ あれ、本当?」

荒木田 「え?」

ユミ 次に来る奴らがとんでもないって」

荒木田 詳しい事は知りません。でも、松島は「の」一帯を9月には転売したいと目論ん

でます。それまでに更地になると…」

玄關の方へ出て行くこうとする章子。それを素早く止める河野。

河野 おい」

アヤの声 だいたいま」

ユミ・河野・荒木田 え?」

ユミ、押入れに荒木田を押し込もうとする。

荒木田 え? え?」

ユミ (荒木田に) 隠れて!」

荒木田 また…」

アヤが居間に入ってくる。丘の上の男、ハンカチで手を縛り、震える手で煙草を吸う。

※ユミ お帰り」

※河野 早かったですね」

ユミ 授業、夜じゃなかったっけ?」

アヤ クビになったの」

河野 ㄴっ」

アヤ (ポケットから何か紙を出し) カルチャースクールに、こんなの送られて来て」

ユミ え?(紙を受け取り)…サエキアヤは淫乱…生徒を片っ端からホテルに…何これ」

河野、チラシを奪い取る。

アヤ バカみたいでしょ」

河野 谷成じゃないですか明らかに。「これでクビって」

アヤ 嘘かホントかじゃないんだって」

ユミ えっ？」

アヤ 「」っていうのが送られて来る時点でダメなんだって」

ユミ 何言ってるの。あたしが文句言ってるよ」

アヤ 「」の」

ユミ でも」

アヤ 実際に生徒さんからそういう噂を聞いたって言われた」

河野 まさか」

アヤ 誰も信じられないよね。「そのまま生徒さん疑いながら教えるのもやだし」

風鈴が鳴る。丘の上に煙草の煙が立ち昇っている。

ユミ 「アヤ姉え、「」、売ろうっよ」

アヤ えっ？」

ユミ 「こないだは百五十万って言われたけどさ、今なら五百万出せるんだって」

河野 まじスか？」

アヤ 誰がそんな事」

ユミ カルチャースクール辞めて、煙草屋だけなんて無理だよ。そんだけあればさ、

引っ越しして、仕事見つかるまで何とかなるんじゃない？」

アヤ お金の問題じゃないの」

ユミ お金の問題だよ。うっん生活の問題。そっでしょ」

アヤ アンタもアタシも「」で育ったのよ。父さんと母さんが残してくれた店よ」

ユミ 父さん達も売った方が良かったって言うっよ。きつと」

アヤ 売りませぬ」

ユミ 何でそんなに拘るのよ」

丘の上の男、丘から降りて行く。

アヤ おかしいでしょ。何も悪い事してないのに。何で出て行かなきゃいけないの？

洋平君も章子も心配しなくていいから。今まで通り自分のやりたい事やって」

河野 すいません。俺「出ようと思ってます。章子と」

章子 洋平…」

アヤ そうなの？」

章子 あたしは」

店の戸口から桑子が入って来る。エプロンに血がついている。

河野 結婚させて下さい…」

章子 ちよつと」

桑子 誰、誰と結婚するの?!」

ユミ (桑子のエプロンを見て) キャーッ…」

河野 「章子と…結婚」

桑子 ああ」

ユミ クワちゃん、それ…」

桑子 大丈夫。アタシの血じゃないから」

ユミ 奈計怖いよ…」

桑子 アヤちゃん、いつ帰って来たの？」

章子 結婚できないう」

河野 なんで」

章子 萩からアメリカに行く事にした」

アヤ えっ」

桑子 ショコタン…」

河野 何それ」

章子 「ごめん。色々考えたけどやっぱりそうする」

河野 ちよつと待てよ」

章子 高校時代の顧問がね、アメリカにいるの。すごくお世話になった人で。アタシがそつちで脚本の勉強したいって話したら、ステイさせてくれるって。あつちで英語勉強して、それから」

アヤ 何で相談してくれないの？」

章子 言えないよ。アヤ姉あたしのせいで仕事辞めたし」

アヤ そんなんじゃない」

章子 それに」

河野 何でだよ。俺お前の為に仕事探して、お前の事考えて」

章子 だからもういいよ。自分の為にやって。色々」

河野 俺の生きがいはお前しかないんだからさあ」

章子 やめてよそんな事言つもの。情けないよ！」

アヤ、章子の頬を叩く。

桑子 アヤちゃん」

アヤ 謝りなさい。洋平君」

章子 (笑) 自分がこつちいう事言われなかったから？ だから腹が立つんですよ」

ユミ 何言ってるのあんた」

章子 こないだ、パスポート作りに行ったよ。で、その前に市役所寄って戸籍取った」

ユミ え…」

章子 あたしき、子供の頃からよく同じ夢を見るのね」

河野 何の話だよ」

章子 それがね、花火大会の夜なの。母さんと手をつないで、神社の裏まで行くの。」

真っ暗でさ、怖いし眠いし、もう帰ろうよって泣くんだけど、母さん全然聞
いてくれないの」

桑子 「シヨたん、やめよ」

章子 やめない。でき、急にバーンって凄い大きい花火が上がって、パツて明る
くなるのよ。そしたらね」

桑子 章子ちゃんっ」

章子 浴衣の女の人もう一人、男の人がバツて振り向くのね。顔は真っ白で…そう、
のっぺらぼうみたいなの。でも二人がびっくりしてるのは分かるの。で、母さんが
ギューって凄い力であたしの手を握る。もう手が潰れそうになるくっ」

ユミ 何なのっ」

章子 痛いっ！ て泣いてんのに、母さん全然手え放してくれないんだもん」

桑子 章子ちゃんが思ってる様な事はないのよ」

章子 ねえ、あの時アタシの父さんと一緒にいたの、アヤ姉えでしょっ」

アヤ 「……」

桑子 違うわよ。章子ちゃんのお父さんは亡くなって」

アヤ ぞうだよ」

桑子 アヤちゃんっ」

アヤ 「一緒に、病院行「うとしてたの」

桑子 言わなくていい…！ 言わなくていいよ…！

ユミ ちづつちづつ事…」

アヤ 子供ができたのね」

河野 「…えっ？」

アヤ (河野に) 私達と章子はね、父親が違うの。父が亡くなって、しばらくして、
母さんに恋人ができたのね。その人が章子の父親。それでね、わたし」

桑子、泣き出す。

ユミ 子供って…」

アヤ うん。私もその人を好きになって…でも、やっぱり産めないから。だから」

ユミ 「信じらんない。あんなヤツと」

アヤ あの人は悪くないの」

ユミ 悪いに決まってるよ。どうせアイツが無理に」

アヤ 違う」

ユミ だって」

アヤ 章子、あの人は本当にあなたの事を可愛がってたんだよ」

ユミ 泥棒なんだよ。あたしの貯金持ち出して逃げたじゃん！」

アヤ アタシなの」

ユミ えっ？」

アヤ 貯金持って出たのはあたし。神社の裏で待ち合わせして。あの人に返して来

いって言われて揉めてた。そこに章子と母さんが来て。…母さんが、あの人が

持ち逃げした事にしたの」

章子 待ってるんだよね」

アヤ えっ？」

章子 父さんを待ってるから、だからこの家売らないんですよ」

ユミ ばかばかしい…(二階へ去る)

アヤ 待ってない」

章子 嘘っ！ 母さん死んでウチ帰って来たのも、(二)で待つ為でしょ」

アヤ 違う。あたしには責任がある。アンタを守る責任が」

章子 嘘つきっ」

アヤに掴みかかる章子を河野が止める。押入れから荒木田が勢い良く出てくる。

河野 「忘れてた」

アヤ さっという事ですか！

河野 や、ちが…」

荒木田 (土下座して) 佐伯さん、この家を私たちに売って下さい。お願いしますっ！

アヤ さ「まで汚い人達なんですかあなた達は！ 人の家に忍び込んで」

荒木田 申し訳ありません。しかし、こちらも時間がありません。明日までなんです。

お願いします。買い取らせて下さい。ユミさんが仰った様に五百万円で買い取ら

せて頂きます。お引越し先も責任持ってお探します。お願いしますっ」

アヤ お金の問題じゃないって言ってるんですよ」

荒木田 お金の問題じゃありません！

アヤ はっ」

河野 やめましょう。荒木田さん」

荒木田 あなたに「ここから出て欲しい。新しい一步を踏み出して欲しい」

ユミが、ポストンバッグを持って二階から走り降りて来る。

アヤ さ「行くの」

ユミ 「これからは会社に泊まる。荷物、また取りに来るから」

アヤ 帰んなさい。兵頭さんのと「」

ユミ 姉えさんに指図されたくない(玄関の方へ)

アヤ ム「」

玄関の方でガラスの割れる音。

ユミの声 きゃーっ…」

河野 天丈夫ですかっ…」

河野に引っ張られて戻って来るユミ。次々と石が投げられ、ガラスが割れる音。

荒木田 アヤさんっ。「」を売って下さいっ…」

アヤ 売りません!」

河野 もういいでしょう。こんな時に」

荒木田 お願ひします! ずっと待ってるなんてあなたらしくない!」

アヤ 「…」

河野 あれ?(台所の方へ去る)

荒木田 あなたは!」

アヤ 誰も待ってません! お引き取り下さい」

台所の方で河野の悲鳴。河野、腰が立たない感じで戻って来る。

ユミ 何?」

河野 災が…台所で。火事だ」

荒木田 えっ!」

荒木田、アヤ、台所へ。桑子も追って台所へ去る。三人で火を消している様子。

震えながら居間で縮こまっている河野。

ユミ、電話をかけようとするが、下腹を押さえてうずくまる。

章子 「…何? ユミ姉え…ねえ(ユミに近寄る)」

外で犬が吠える声。そして長友・兵頭の声も聞こえてくる。

店の戸口から走り込んで来る長友と兵頭。二人ともかなり荒い息をしている。

長友 着いてくんなよ!」

兵頭 お前だろそれ!」

長友 お前がいると犬が離れねえんだよ」

兵頭 (荒い息で) バカやロー。二つちのせりふだ!」

長友 ああん?」

兵頭 お前がいるから」

取っ組み合いが始まる。

章子 兵頭さんっ……兵頭さんっ、ユミ姉えがー！」

兵頭 えっ……ユミ……ユミ、大丈夫か……おいユミっ！」

荒木田が居間へ戻って来る。

荒木田 大丈夫、ボヤですから。もう……(台所へ)アヤさん！」

アヤたち、戻って来る。アヤ、ユミに走りより、その状況を察して

アヤ あんたまさか」

桑子 ユミちゃん」

アヤ 兵頭さん、知らなかったの？」

兵頭 え、俺……どうしよう。俺、俺のせいで……」

アヤ ユミ、ユミ」

荒木田 救急車を(電話の方へ)」

長友 そんなもん呼ばんでいい……」

※荒木田 何て事言っんですか……」

※兵頭 お前っ……」

長友 連れてってやるよ俺が。病院」

荒木田 え？」

長友 車で来てんだろ。」

荒木田 そっか」

長友 早くっ！ 救急車なんか呼んでる間にお前……」

荒木田 はいっ」

アヤ でも……」

荒木田 病院、この近くの。どっですかっ。」

桑子 国道左に行って、インターチェンジの手前。えっと、川勝総合病院」

長友 よし。隣の空き家の前に停めてっから。運んでくれ」

兵頭、ユミを抱えようとするが、持ち上がらない。

長友 何やってんだよ」

長友、ユミを軽々と抱え戸口の方へ。長友の鞆を持ち、先導する荒木田。

兵頭 おいお前っ！…長友さん、お願いしますっ」

長友 「…そんな事言ってる場合じゃねえだろっ」

荒木田、ユミを抱えた長友、兵頭、販売窓の外を走り去る。犬が吠える。

長友の声 「っせえー！」

犬のキャインという声。

桑子 ちよっと」

アヤ 私もタクシーで追いかけるわ。章子、戸締りして。それから消防署に電話。

火は消えたけど調べてもらわないと」

桑子 アヤちゃん」

アヤ クワちゃん、帰った方がいいんじゃない？ おじさん一人でしょ？」

桑子 うん…」

アヤ、戸口から去る。

桑子 じゃあ…あたし帰るけど」

章子 うん」

桑子 大丈夫？」

章子、頷く。

桑子 キョウダイなんだよ。ユミちゃんもアヤちゃんも。それは変わらないんだよ。

何があっても」

黙っている章子。桑子、去る。ややあって、章子は電話の方へ。

河野 ハハハハ」

章子 え…」

河野 情けねえ…ハハハハ」

章子 (電話をかけ)…すみません。松川町2丁目5の28の佐伯煙草店です…はい、東から五軒目の…ホヤがあつて。放火じゃないかと…いえ、もう消えました。…はい。お願いします」

河野 お前の為にとか言つといて、アホだな…何もできねえ…俺…」

河野、笑っているのか泣いているのか。章子、河野の隣に座る。

雨が降り始める。音楽とともに、溶暗。

■第四場 八月三十日 夕方

ツクツク法師の鳴く声。店の売り物は片付けられ、販売窓の傍らに煙草の在庫が山盛りのダンボール箱一つ。他にもダンボール箱が幾つか。

居間の細かい物は無くなり、スッキリしている。オーディオ棚のCDやレコードはその

まま。花柄のマタニティードレスを着たユミが玄関の方から入って来る。

ユミ 「アヤ姉ネー…章子おー」

誰も出て来ない。ユミ、店へ降り、殺風景になった店内を歩く。章子が二階から降りてくる。

章子 エミ姉」

ユミ オッス」

章子 (爆笑) 何その格好、似合わね〜」

ユミ じようがないじゃん妊婦なんだから」

章子 買ったの？」

ユミ 兵頭がね」

章子 マジで？」

ユミ まだ全然普通の服着れんに」

章子 おっぽど嬉しかったんだね」

ユミ 「これだけじゃないよ。オムツ」

章子 えっ？」

ユミ 押入れにいっぱい」

章子 すいーい」

ユミ 形から入るタイプだから」

章子 ハハハ……(棚のCDを物色しつつ) もっいいの？体調」

ユミ うん。時々つわりはあるけど」

章子 「つかしるヶ月も気づかないってどうや」

ユミ 「や、前から生理不順だったし。気持ち悪いってっても、いつもの二日酔いかと」

章子 あきれた」

ユミ うるさいよ。アヤ姉は？」

章子 挨拶回り」

ユミ そっか。明後日だもんね…(周りを見回し) スッキリしちゃったな」

章子 うん」

ユミ 信じらんない。無くなるなんて」

章子 賛成してたじゃん。地上げ」

ユミ そうだけど。寂しいのは寂しいよ」

章子 あそ」

ユミ 準備できた？」

章子 うん。オッケー」

ユミ あんた、あの…彼は？」

章子 洋平？今日青森に帰る」

ユミ えいっ」

章子 (手を止め) 何が？」

ユミ 会ったりしなくて」

章子 「っぱい話したから。昨日も会ってたし」

ユミ ぶーん。まあ、人生色々だね」

章子 でも後悔してないって。実家でゆっくり考えるって。今後の事。ホントにやりたい事とか…(またCDを物色する)

ユミ そっか。…ねえ」

章子 何？」

ユミ さきつと

章子 何よ。…え、何それ

ユミ 封筒を手にも、ユラユラさせている。

ユミ せん、スシ

章子 ええー、いいよー

ユミ 何で?

章子 ヨミ姉だつてこれから物要りじゃん。仕事も辞めちやったし

ユミ 兵頭に稼いでもらうわよ。アイツが辞めろつたんだから。ビシバシいくよ

章子 「わー」

ユミ ういさい。ほれっ(封筒を章子に投げる)

章子 さよっ、さよめ

ユミ ㄷㄷ

章子 ㄷㄷ

ユミ ㄷㄷいばー

章子 も〜

ユミ 餓別もらつても〜はないでしょ

章子 あぞーす

ユミ あっ

店の戸口から内藤が入って来る。章子、封筒の中身を見る。

※章子 えっ!ちよつと「れ!」

※内藤 「んにちは」

ユミ はい

内藤 ちよつと

ユミ あ…内藤さん…

内藤 あなの…」

ユミ 「…先日はその」

※ユミ すみませんでした」

※内藤 「メンナサイ」

ユミ え？」

内藤 私、ひどい事言いました」

ユミ でもあれは…」

内藤 地上げされて」

章子 何それ？」

ユミ 「じゃ」

内藤 ホントに地上げされた」

ユミ 違うのよ「これは」

内藤 来来軒も地上げされたよ」

ユミ そうなんだ」

内藤 ハチあたたね」

ユミ それは関係ないんじゃない」

内藤 「こゝ外人働かせてる言われて、店長連れていかれました。仲間も」

ユミ 内藤さんは…」

内藤 休んでました。カジエで」

ユミ ああ、それは…ラッキー」

内藤 ラッキーないです」

ユミ そうだね」

内藤 店長いい人。私たち名前付けて働かせてくれた。名づけ親だよ。でも、私たちの

せいであちかまた。…恩を仇で返したい」とやね」

章子 何で関西弁」

ユミ 「れかぶらつするのっ」

内藤 逃げます！（戸口の方へ）

ユミ え、内藤さんっ」

内藤 チンですっ」

ユミ 「っ」

内藤 私の名前、チンです。お世話になりました。アヤさんにも挨拶したかたけど。

さよなら

内藤、出て行く。

章子 ええっ」

アヤの声 あ、チンさん！ ちょっと待って！

アヤ走り込んで来て、居間の箆笥から小さい包みを取り出し、また出て行く。

アヤの声 チンさんっ、これ」

内藤の声 ありがとうございます！

ユミ っ？チンさん？…内藤？内藤チン。ああっ」

章子 何それ」

アヤ、帰ってくる。

ユミ 何あげたのっ」

アヤ エプロン」

ユミ 「百田のっ」

アヤ そのくらいだったかな。何か気に入ったらしくて。お母さんに送りたいんだって」

ユミ 「えっ」

アヤ、ユミを改めて見て噴出す。

アヤ 何その格好」

章子 似合わないよねえ」

二人、爆笑する。

ユミ 笑うなっー」

アヤ 「めんめん」

章子 「物色したCDをアヤに見せ(ね、これ持ってたっら?)」

アヤ 「いよ」

章子 ありがとう(二階へ去る)」

アヤ 兵頭さんは?」

ユミ ぬ?いっのいっの」

アヤ 「いっのって。今日車出してくれるって」

ユミ うん。まあ」

アヤ 「買ったの?車」

ユミ 「いっの」

アヤ 何?うまくいっの?」

ユミ お陰様で。何?(お腹をさすって)カスガイでヤツ?」

アヤ 「良く決心したわね。仕事」

ユミ 「いっのがないよ。兵頭より誰より(腹を指し)コイツが許してくれないんじゃ」

アヤ (笑)そっか。でも楽しみねえ」

ユミ フッフ」

アヤ そうだ。あんたさ、この子産まれたら洋服作ってまない?」

ユミ 何いきなり」

アヤ 荷物整理してたらね、出てきたの。母さんが作ってくれた服」

ユミ へー、まだあったんだ」

アヤ うん。箆笥の隅にしまってあった。アンタのスカートとか、あたしのブラウスとか」

ユミ ぶーん…」

アヤ 教え上げるよ。作り方」

ユミ 「いい不器用だし。裁縫なんか」

アヤ 覚えれば簡単だって。いいわよ。自分が作った服を子供が着て、で、その子が

大きくなったら、アンタが作った服を見て、子供の頃を思い出したり…

もしかしたら、その子も自分の子供に作ってあげようって思うかも」

ユミ 「アヤ姉が洋裁始めたの、母さんの影響？」

アヤ とうだったっけ？ 忘れちゃった」

ユミ アヤ姉（アヤの手を取る）」

アヤ 何？」

ユミ アヤ姉も、幸せになんないやだめ」

アヤ 「…」

店の戸口から桑子が入って来る。手に紙包みを持っている。

桑子 ショコたんはっ？」

ユミ クワちゃんっ」

アヤ 「んや」

桑子 良かったあ」

アヤ （二階へ）章子おー、クワちゃん来たわよー」

桑子 「ユミ」何その格好！」

ユミ もう！ クワちゃんまで！」

桑子 だって（笑）」

ユミ （桑子の包みを見て）あ、それっ！」

桑子 フッフッフッ、エバトメーカーリーの」

章子、走り降りてくる。

章子 田の出あんばん…」

ユミ 子供かっ」

三人笑う。桑子、居間へ上がり、女たちでキャッキヤと包みを開ける。

アヤ クワちゃん、ありがとう」

ユミ ありがとうー。わー美味しそうー。いただきます…おえっ」

ユミ、トイレの方へ走り去る。

桑子 つわりっ？」

アヤ まあ、大丈夫でしょ」

章子 「ただきまあす」

アヤ ちゃんとお礼いいなさいよ」

桑子 「いいのいいの。お饞別。ね」

アヤ えっ？」

章子 アタシのリクエスト」

アヤ あらそう(笑) お茶入れるね(台所へ去る)」

桑子 (台所の方へ) ありがとう。…すっっいい並んてだよ。エバトペーカリー」

章子 ああ。あすこも明日までか」

桑子 ショコたん行っちゃうんじゃないかってヤキモキした」

章子 ハハハ」

桑子 「……ショコたん…その、アヤちゃん」と

章子 クワちゃん」

桑子 えっ？」

章子 色々ありがとう(ぎざいました)」

桑子 だ、やめてっ」

章子 ホントに」

桑子 「いよもう」

章子 明日帰るんだっけ。旦那さんと」

桑子 うん。父ちゃんも連れてね」

章子 そっか。…クワちゃん」

桑子 へん？」

章子 幸せ？」

桑子 へん？」

章子 クワちゃんは幸せ？ ホントにそれで」

桑子 「…(笑) 当たり前じゃない。父ちゃんと、シヨウト、みんな一緒に暮らせるんだよ。幸せに決まってるでしょ」

章子 じゃあ良かった」

ユミ (戻って来て) 何が幸せ？」

章子 大丈夫？」

ユミ うん、もう慣れた」

アヤ、麦茶とグラスを載せた盆を持って戻って来る。

アヤ お待たせー。(ユミに) あんたやめとけば？」

ユミ やだ食べるう」

アヤ たって」

ユミ 違うの。お腹空いてる時に匂い嗅ぐとウツてなるの。でも「うやうやって食べるな

(あんぱんを齧り) ん、おいしく。最高」

一同、談笑しながら麦茶を飲み、あんぱんを食べる。勢い良く食べ過ぎてむせるユミ。

ベレー帽を被った兵頭が入って来る。

兵頭 あっー」

ユミ ちょっと入ってこないでよ」

アヤ 兵頭さん、いらしてたんですか？」

兵頭 さうも。おい、また食ってんのか」

ユミ だって」

兵頭 妊娠中だからって食いすぎちゃだめなんだぞ」

ユミ 『いいじゃん。我慢すると変な子になっちゃうよ。ストレスで』

兵頭 怖いと言っつな」

アヤ むーユミ、なんで上がってもらわないの。(兵頭に)「めんなさいね。兵頭さんもどうぞ」

長友が入って来る。同じくベレー帽を被っている。

長友 タクちゃんまだ？」

兵頭 『めん。たっちゃん』

一同 「……」

長友 「一同に)どうぞ」

一同 (あいまいな挨拶)」

長友 (ユミに) あそ、「あんまり長く停めとけないんで」

ユミ ああ」

兵頭 章子ちゃん、渋滞したらまずいから、そろそろ出ようか」

章子 あ、はい」

二階へ上がっていく章子。

アヤ あの…その節は、お世話になりました」

長友 ああ、いえいえとんでもない。「ちら」そ色々」迷惑を」

桑子 あの、…(帽子を指し)それは」

長友 ええ。私アシスタント兼運転手やらせてもらっ事になりました。タクちゃん、いや、兵頭先生の」

兵頭 やめてくれよ先生なんて。(一同にアシスタントっていうか、これからは二人で描「っ」と思ってるんですよ)」

アヤ 容作？」 桑子 でも何でベレー帽？」

兵頭 ええ」 ユミ 形から入るタイプだから」

長友 まだ無理だよ。俺はもっと勉強してさ」

兵頭 今で十分だよ。それに発想が面白いからね。タツちゃんのアイデアがあれば」

長友 「やいや」

二人、謙遜したりほめたりとじゃれ合う。

ユミ あの、車の方大丈夫かな？」

長友 あ、そつだ。じゃ、あつちで待ってるんで」

兵頭 お、俺も…(行きかけて自分のベレー帽をユミに被せ) あんま食い過ぎんなよ」

ユミ、ベレー帽を冷たく払い落とす。

兵頭 あっ 何すんだよ！」

大慌てで、帽子を拾い、被り直したりそれを整えてやったりする兵頭と長友。

ユミ 「いから早く行け！」

兵頭・長友 はい」

嫉妬してんのかな、などと笑いつつ玄関の方へ去る二人。

桑子 なんて？」

アヤ タクちゃんとかたつちゃんとか」

ユミ 「こないだ分かったんだけど、アイツら昔、同じ少年誌に漫画投稿してたのよ」

桑子 へえー」

ユミ そんな時のペンネームが、長友さんがタツミジュン。で兵頭が、サカキタクロウ」

桑子 微妙に格好いいね」

ユミ 「二人ともよく入選してて。会ったことないけど、良きライバル？みたいなの？」

そう思ってたんだって。長友さんは色々あってやめてたけど、これを機に復活」

桑子 で、合作？」

ユミ そう」

アヤ 社会派漫画で？」

ユミ 中コマギャグ漫画で」

桑子 なんて？」

ユミ まったく。四十にもなって「まんが道」かよ」

玄関の方から車のクラクション。

ユミ (玄関の方へ) はあーい！(二階へ) 章子ー、まだー？」

章子の声 今行くー」

アヤ ベンネームとかどうすんの？」

ユミ タツミタクロウでいくって」

桑子 食いしん坊万歳かよ」

アヤ 初代？」

桑子 初代は渡辺文雄でしょ。それまずいんじゃない？」

アヤ いるからね。一人の人間として」

ユミ 面白いからほつと「う」かと思って」

桑子 それは言おうよ」

兵頭の声 まだかー」

ユミ うるさいな。章子ー、先車んど二行ってるから、早くね。(アヤ達に) じゃ行くわ」

アヤ うん。お願いね」

ユミ、玄関の方へ去る。章子がスーツケースを持って二階から降りて来る。

章子 (アヤと桑子に) じゃあ、行ってきます」

アヤ うん。章子……」

章子 ちん？

アヤ (ママを渡し)「これ、住所。ここが無くなるからって、あんたの家が無くなる訳じゃないんだから。…いつでも帰るといはあるんだからね」

章子 やめてよ

アヤ え…

章子 内心超びびってたから。そんな事言われたら飛行機乗れなくなるよ

アヤ (笑)「めん」

章子 死ぬ気でやって来いべいの事言ってるね

アヤ だから、帰るといはあるんだから、死ぬ気でやんなさいって事

章子 うん

アヤ 行ってさっさと

章子 行ってきます。クワちゃんも元気だね

桑子、うなづく。章子行きかけて振り返る。

章子 アヤ姉…

車のクラクション

章子 じゃあ。(出ていく)

桑子 「…行かなくていいの？見送り」

アヤ うん。引越しの準備もあるし…食べよ

桑子 うん

二人、残ったあんぱんを食べる。

桑子 懐かしいね

アヤ え？

桑子 よく食べたじゃん。二人で。どっちかの家に泊まって

アヤ ああ、そうだね。帰りにエバトベーカリー寄って

桑子 ゼウゼウ」

アヤ クワちゃんち行くと、これにキリマンジャロがついた。おじさんが淹れてくれて」

桑子 (笑) 父ちゃん、好きだから。アヤちゃんの事」

アヤ ほんとっ」

桑子 あの子は俺のギャグが分かる。センスあるって」

アヤ アハハ、おじさんの駄洒落」

桑子 あんなんでも良く笑えるよ」

アヤ 面白かったよ」

桑子 面白くない面白くない」

笑い合う二人。アヤ、桑子の空いたグラスを見て

アヤ 麦茶いる？」

桑子 匂、ありがと」

桑子のグラスに麦茶を注ぐアヤ。

桑子 「……アヤちゃん」

アヤ 匂？」

桑子 あのね……ずっと謝りたかった事があって」

アヤ え？」

桑子 あの時、節子おばちゃんから電話して来たって言ったでしょ」

アヤ 「……」

桑子 あれ、嘘。ほんとはアタシがおばさんに知らせたの」

アヤ ゼウ」

桑子 約束破ってごめんね。絶対言わないつもりだったけど。アヤちゃん、病院じゃな

くて、あの人とどっか行っちゃっくんじゃないかって。そう思ったら、もっ……」

アヤ 「いよ。そんな事」

桑子 え？」

アヤ 知ってたよ。母さん。アタシが母さんだったら、分かるよ。そんなの」

桑子 「…嫌いにならない？ アタシの事」

アヤ 何言ってるの」

桑子 もう、待ってないよね。あの人の事」

アヤ (笑) 待ってない待ってない。ど「に」いるかも知らないし。ど「か」で結婚でもしてん
じゃない。昔の「と」だよ」

桑子 そ「か」。…ね、中学ん時さ、将来の話とかよくしたよね」

アヤ うん」

桑子 「二人で一緒に家買って住もうとか。言ってなかった？」

アヤ (笑) 言ってたあ。簡単に考えてたなああの頃は。そんなのすぐ出来ると思ってた。
子供だったね」

桑子 住もうか。一緒に」

アヤ え？」

桑子 卒なら出来るかもよ。家買つのは無理だけど、一軒家借りてよ」

アヤ 何言ってるの。明日から家族みんなで暮らすくせに。広いマンションで」

桑子 「…」

アヤ 良かったね、クワちゃん。おじさんもショウ君も、みんな一緒に暮らせる事に
な「つ」て。アタシも嬉しい。おめ「て」よ」

桑子 「…うん。ありがとう」

アヤ 「これ食べられるかな。もっと食べない」

桑子 もういいや。お腹一杯」

アヤ そ「う」」

桑子 そろそろ帰るね(店の戸口の方へ)」

アヤ むっ？」

桑子 うん。荷物整理終わんなくて」

アヤ そっか」

桑子 アヤちゃんも頑張ってる」

アヤ うん…」

アヤ、框に座ってサンダルを履く桑子の傍へ。

アヤ クワちゃん」

桑子 ん？」

アヤ アタシね。ホントはこれからどうしていいか分かんない。何にも思い浮かばな

い。…急に誰も居なくなってる、何していいか。(桑子の肩に頭をもたせかけ)

ね、幸せになるってどういう事？ どういう状態？ 今が幸せか不幸かも分かん

ない。なのに幸せになれて言われてもさ…何も言えないよ」

暫くそのままの二人。桑子、振り向くと、アヤを抱きしめそうになるその手で

アヤの肩を叩く。販売窓から荒木田が見ている。

桑子 変わんないね。アヤちゃんは」

アヤ え？」

桑子 頑固。そんなのさあ、嘘でも分かんなくても「はい」って言うちゃえばいいのよ。

分かんなくても、「幸せになります」って言うっちゃえばいいの。アタシなんかすぐ

言うっちゃっ。いい加減だから。ちよつといい事あると「アタシ幸せー」って。言えば

その気になるもんよ。知ってる？「幸せは、いつも自分の心が決める」ってね」

荒木田、戸口から拍手。桑子、アヤから離れる。

アヤ 荒木田さん」

荒木田 桑子さん、いい。いい事言うなあ」

桑子 「…」

アヤ 荒木田さん、色々ありがとうございました」

荒木田 さんでもない。私の方こそ」

アヤ さうぞ上がってください。お茶淹れます」

荒木田 「や、気を使わないで下さい。今日は引越しのお手伝いに来たんで」

アヤ そんな、手伝いなんで」

荒木田 「え、何でも言っして下さい。明日は休みです。ビシビシ使っして下さい。ハハハ」

アヤ すみません何だか。とりあえず、上がって下さい」

アヤ、台所へ去る。

荒木田 クワコさん、さっきの、感動しました」

桑子 あれ、みつおだよ」

荒木田 「？」

桑子 『幸せは、いつも自分の心が決める』相田みつお」

荒木田 「ああー。好きなんですなえ。みつお」

桑子 嫌いだね」

荒木田 え…」

桑子 アンタさ、アタシの事ホントにクワコだと思ってるの？」

荒木田 え？」

桑子 クワコだと思ってるのかって聞いてんのよ」

荒木田 えっ！じゃあ誰なんですかっ？」

桑子 別人だっって言ってるんじゃないよ」

荒木田 ば？」

桑子 フ・ウ・コ。桑に子供の子でソウコって読むの。クワコとか気安く呼んでんじゃね

えよ」

荒木田 すいませんん」

桑子 ちゃんちねよ

荒木田 えっ

桑子 手伝いっ

桑子、去る。

荒木田 「すっげえ怒られた。何で？」

荒木田、ややあって居間へすばやく上がり、鞆から一枚のCDを出して棚に忍びませる。アヤが麦茶を持って入って来る。

アヤ えっ

荒木田 あっ

アヤ 「…お茶どうぞ

荒木田 あ、ありがとうございます。いやー、すっげえクシヨンをすねえ

アヤ そうでもないですわ

荒木田 「やいや

アヤ あの良かったらこれもあんぱんを勧める」

荒木田 あ、すみません」

二人、無言で食べる。

荒木田 あの…」

アヤ はい

荒木田 あそこ良かったんですか？ マンション」

アヤ ええ

荒木田 ちょっと手狭じゃないかと

アヤ 十分です。大きい家具は売りましたし。一人暮らしですから

荒木田 そっすか？

アヤ 同じ場所に根っこが生えちゃうタイプだから、次は身軽にしておこうかと

荒木田 そうですね。結婚でもされたらまた引越さなきゃいけないですし」

アヤ (笑)まさか。もう結婚なんて考える年じゃ」

荒木田 何ですかっ。全然考えてますよ僕は。今年でもう四十一ですけどね」

アヤ 「えっ！ 荒木田さん、四十五年生まれ？」

荒木田 はい。えっ？」

アヤ じゃ、同じ年っ」

荒木田 そうなんですか？ 僕十一月」

アヤ 秘、七月で」

荒木田 じゃあ、ちょっとだけ姉さん女房だ」

アヤ えっ」

荒木田 何でもありません。そろそろやりましょうか」

アヤ むうちよっとゆっくり」

荒木田 大丈夫ですっ！ 何でも言っして下さい」

アヤ そうですか。じゃあ…あれ」

荒木田 はいっ」

アヤ (煙草の在庫が溢れるダンボールの方へ) この箱、一人じゃ閉められなくて」

荒木田 ああ。こりや大変だ」

アヤ、台所へ行きガムテープを取ってくる。荒木田、ダンボール箱の蓋を押さえて

荒木田 アヤさん、私押さえていますから、いきなりやっちゃって下さい」

アヤ (ガムテープを構え) はいっ」

荒木田 むうー…アヤさん、今、今」

アヤ あ、はい」

アヤ、いつきにガムテープを貼り、荒木田の手も一緒に貼り付ける。

荒木田 あ、手、手」

アヤ 「「めんなさい」」

荒木田 「え、ノープロブレムです」

アヤ、ガムテープをはがそうとする。

荒木田 イタタタツ、毛が、毛がッ

アヤ 「「めんなさい」」

荒木田 フ、ノープロブレムです」

アヤ、痛く無い様にガムテープをはがそうとして悪戦苦闘。

荒木田 え？え？ アヤさん？」

結果二人ともテープに手が絡まる。

荒木田 イタツ」

アヤ 「「めんなさい」」

荒木田 「え」

アヤ 確かあつちにハサミが(台所の方へ)

荒木田 (引っ張られていきながら) イテテテ」

二人、くっついたまま台所へ消える。以下声と息遣いのみ。

アヤの声 「「めんなさい」」

荒木田の声 「えいえ。「こつちですか？」」

アヤの声 はい……(トタバタと物音)あ、ハサミが…取れないっ!!」

荒木田の声 まって…落ち着いて」

アヤの声 はい…あ、あった」

荒木田の声 イテッ」

アヤの声 「「めんなさい」」

荒木田の声 大丈夫。もっと…ゆっくり。…そう」

アヤの声 はっ」

荒木田の声 「もっどー」

アヤの声 「イヤイツ。あっ」

荒木田の声 「すいません」

テープが剥がれたらしく、荒木田が居間へ戻ってくる。どことなく満足げ。

アヤ 「戻ってきて」 本当に、すいません」

荒木田 「えむしろ、ノープロブレムです。それ貸して下さい」

荒木田、アヤからガムテープをもらい、段ボールに馬乗りになって蓋を閉じる。

アヤ 「そうすれば良かったんだ」

二人笑い合う。

荒木田 「ホントにそうかもしれないな」

アヤ 「え？」

荒木田 「クワコ…あ、ソウコさんが言っていたこと。幸せは自分の心が決める」

アヤ 「ああ」

荒木田 「私、半年前ここに来たんです。あそこの販売窓から煙草を買いました」

アヤ 「そっだったんですか」

荒木田 「はい。幼稚園が閉鎖されて無職になって…なかなか仕事は見つからず。

難しいでしょ。」の年で中途採用って」

アヤ 「ええ…」

荒木田 「あ、アヤさんは大丈夫ですよ。手に職がおりなんだし」

アヤ 「はあ」

荒木田 「僕なんて、この年になるまで子供の世話しかしてなかったから。まあ、とにかく」

印隠滅滅。ジメジメしてた訳です。毎日下ばかり見て歩いて。

でも、「この前を通った時、ふと顔を上げたら、その窓に明かりが点いてたん

です。他所はみんな閉まっているのに、遅くまでやっているんだなあと思って。

その窓を開けました。…そしてそこに、アナタがいた」

アヤ 「あ」

荒木田 ぞして、手袋をくれました」

アヤ 手袋？」

荒木田 はい。(手袋の形をジェスチャーで) 二ーんな感じの、白い手編みの。僕の霜焼けを見て。売れ残りですからって」

アヤ やだ、売れ残りだなんて言ったんですか？」

荒木田 「や、嬉しかったんです。何だかホントに嬉しくなっちゃって…またここに来たい

と思ったんですよ。ここに毎日煙草を買いに来たいって」

アヤ 「…」

荒木田 で、翌日駅前の不動産屋に就職しました。張り紙見て。ここなら毎日煙草買いに行けるなあって。そしたら不動産屋じゃなくて、地上げ屋になっちゃいました」

二人、笑う。

荒木田 間の悪いやつでしょう？いつもそうなんですよ。我ながら嫌んなる」

アヤ でも、もう関係ないんですよ。その、普通の不動産屋の仕事に」

荒木田 ええ。戻りました」

アヤ 良かったですね」

荒木田 はい。あ、すみません。良かったなんて。あなたの前で…」

アヤ 「ええ」

荒木田 幸せです」

アヤ えっ？」

荒木田 色々あったけど、あなたとこうやって話ができる様になった。煙草買うところか

普通に話してる。名前も覚えてもらってる」

アヤ そんな」

荒木田 以前は道の暗いと「ぼっかり歩いた。でもちょっと顔上げて明るい方へ行って
みたら、あなたに会えた。この先もっと良い事が起きる。

そんな気がするんです。単純ですかね？」

アヤ 明るい表通りで」

荒木田 「え？」

アヤ そういう、歌があるんです。荒木田さんにぴったり」

荒木田 「え」

アヤ 下向いて、ずっと暗いと「を歩いてたら悪い」とぼっかり起った。

でも顔上げて、道の明るい方を歩いてみたら気持ちもパツて明るくなった。

お金が一円もなくとも大金持ちになった気分。もう大丈夫。

「これからはいい」とぼっかりだよって」

荒木田 ああ」

アヤ 「この歌、亡くなった父と母が大好きで。私も。(オーディオ棚の方へ)でも最近

見当たらず…あれ？」

アヤ、荒木田がさっき忍び込ませたCDを手にする。

荒木田 アヤさん」

アヤ はい」

荒木田 今日、一緒に花火大会に行きませんか？」

アヤ え…」

荒木田 今年で最後なんですよね？」

アヤ ええ」

荒木田 行きませんか？」

アヤ 「…」

荒木田 「や、忘れて下さい。…すいません。こんな事言える立場じゃないですよね」

アヤ 「行きましょっか」

荒木田 え？」

アヤ 花火」

荒木田 「ホントですか？」

アヤ はい」

荒木田 ああっ…やっ、じゃ、急いで終わらせましょっ！次、何やましょっかっ」

アヤ 大丈夫ですよ。引越しまでもう一日」

荒木田 あーっ！」

アヤ 何？」

荒木田 浴衣」

アヤ は？」

荒木田 任立てたんです。アヤさんが一緒に行ってくれたら着ちやおっかななんて」

アヤ あ(笑)」

荒木田 (笑) 先に浴衣だけ準備しちゃってました。(腕時計を見て) もうこんな時間か

…一昨日仕上がったんですけど、すぐ取りに行けばよかった」

アヤ せーのお店ですか？」

荒木田 えっと、あの一、駅向こうの、澤の井中学の横手の心臓破りの坂を上って」

アヤ 細い路地を右手に」

荒木田 そうそっ、中古レコード屋の流行堂！…あっ…の、向かいです」

アヤ 箕輪呉服店ですね」

荒木田 はい」

アヤ あそこならまだ開いてるんじゃない？」

荒木田 行ってみますっ。すいません。手伝い中途半端になっちゃって」

アヤ そんな。荒木田さん車？」

荒木田「え、あの車、長友さんの。急に辞めちゃったんですよ。長友さん」

アヤ「ああ…」

荒木田「本当に車ないと仕事にならない。て、そんな事言ってる場合じゃないー」

アヤ「大丈夫ですか？」

荒木田「はいっ。これでも陸上部だったんです中学ん時。じゃあー！走り出す」

アヤ「気をつけて」

荒木田「戻って」待ち合わせ」

アヤ「えっ」

荒木田「私、事務所で着替えてきます。待ち合わせを」

アヤ「じゃあ、公園の入り口に銅像あるの分かります？」

荒木田「はいっ」

アヤ「あそこの前で、7時に」

荒木田「はいっ（行きかけて）あっ」

アヤ「何っ」

荒木田「アヤさんも、良かったら浴衣で…ハハッ！」

荒木田、店の戸口から走り去る。アヤ、見送って戸口を閉め、カーテンを閉める。

アヤ「嬉しそうに卓袱台を片付けっ… ……浴衣って言われても、どにに」

グラス等を台所へ片づけると、二階へ上がって行くアヤ。暫くして居間で電話が鳴る。

誰も出ない。電話が切れる。風鈴が鳴る。次第に暗くなる店内。

アヤ、浴衣を持って降りてくる。姿見の前で浴衣を合わせて見る。しばらく立ち尽く

している、花火大会を知らせる空砲が鳴る。五回目の空砲。戸口の方を振り返る

アヤ。何も起きない。電話が鳴る。

アヤ「むしもし…むしもしっ…あ、(笑)何だ「ミ」…何でもない。んっちよと聞「え

ない…ああ、高速なの…もうすぐ空港っ…んっああ、いいわよ。気をつけていっ

てっぺんじやいって伝えて…えっ来なくていいわよ。忙しいでしょ。引越し屋さん頼んでるし。…うん。じゃね。ありがと…」

アヤ、電話を切り、さっき棚から出したCDをかける。オーディオから流れるトランペットの音色。――明るい表通りで「――アヤ、再び浴衣を手取る。

アヤ 「……幸せ」

アヤが浴衣に着替え始めようとすると、販売窓が開く。販売窓の方へ行くアヤ。

アヤ 「さっしやいませ。何にしましたようか？…はい。少々お待ち下さい」

アヤ、在庫をいつもの様を探すが、既にダンボールに仕舞われていた。

荒木田が閉めてくれた箱に軽く手を合わせて梱包を解き、ゴールデンバットを

一つ取り出す。販売窓に戻り、それを客に渡すアヤ。

アヤ お待たせしました…いえ、御代は結構です。うち、今日で閉める事になりました

…最後のお客様ですから。長い間ありがとうございました。(笑)すみません。

初めていらっしやったかもしれないの」

アヤ、会釈して在庫の箱の方へと。が、また販売窓へと戻る。

アヤ 何ひ……」

販売窓からゆっくりと男の手が伸びてくる。その手には包帯が巻かれている。

どんどん夕闇が落ちてくる。男の手はアヤの髪を撫で始める。

奥の高み(別空間の丘の上)に、息を切らした荒木田が登ってくる。

荒木田(荒い息で)開いてたあーっ…」

荒木田、満面の笑み。その頭上に最初の花火が打ち上がる。

更に音楽が盛り上がる中、暗転。―― 終わり――

◇戯曲中の表記について

上下二段で記載される台詞は同じタイミングで発する。※役名』で並列して記載されている台詞、役名・役名』の下に記載されている台詞も同時に発する。

◇問合せ先 三谷智子 mitanin78@gmail.com 迄メールで「」連絡下さい。